

Title	認知・機能言語学研究(6) (冊子)
Author(s)	
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2021, 2020
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/85191
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

言語文化共同研究プロジェクト2020

認知・機能言語学研究 VI

小 薬 哲 哉
坂 場 大 道
瀬 戸 義 隆
田 尾 俊 輔
中 尾 朋 子
早 瀬 尚 子

Hiromasa ITAGAKI

大阪大学大学院言語文化研究科

2021

言語文化共同研究プロジェクト2020

認知・機能言語学研究 VI

小 葉 哲 哉
坂 場 大 道
瀬 戸 義 隆
田 尾 俊 輔
中 尾 朋 子
早 瀬 尚 子

Hiromasa ITAGAKI

大阪大学大学院言語文化研究科

2021

言語文化共同研究プロジェクト2020

認知・機能言語学研究 VI

目 次

小 薬 哲 哉	： V 方ヲスル構文の解釈と二種類の動詞スルー叙述の種類の観点から	1
坂 場 大 道	： Glad の意味についての一考察	11
瀬 戸 義 隆	： if + will 条件文における形式・意味機能に関する考察	21
田 尾 俊 輔	： 単義説・多義説・多使用論の建設的検討：英語前置詞 at を例にして	31
中 尾 朋 子	： 移動の阻止を表す使役移動構文の意味構造	41
早 瀬 尚 子	： XYZ 構文の拡張から見る構文スキーマの位置づけについて	51
Hiromasa ITAGAKI	： On the Extension of Copulative Perception Verb Constructions	61

：

V方ヲスル構文の解釈と二種類の動詞スルー叙述の類型の観点から*

小葉 哲哉

1. はじめに

本稿では、「面白い走り方をする」のように、動詞スルーが名詞「V方」(以下、方名詞と呼ぶ)を目的語としてとる構文を「V方ヲスル構文」と呼び、形式と解釈の特徴について考察する。このV方ヲスル構文は、日本語のいわゆる「Nヲスル」構文の一つと考えられる。Nヲスル構文には様々なタイプがあり、活発な議論が行われてきた。例えば (1a) 出来事を表す事象叙述を行うタイプと、(1b) 恒常的な状態を表す属性叙述を行うタイプが存在する。

- (1) a. 太郎はサッカーをしている。 / 花子は恋をした。
b. メアリーは青い目をしている。 / このコーヒーはさわやかな味をしている。

先行研究では、事象叙述解釈か属性叙述解釈かによって、Nヲスル構文を異なる下位構文に分けることが多い。ここで生じる疑問は、事象叙述タイプと属性叙述タイプの違いは、何に起因するのかというものだ。これまでの研究では、主として目的語名詞句の語彙的違いに起因するとされた。つまり、特定の意味クラスの目的語名詞句が、事象あるいは属性の解釈に関与していると考えられている。

しかし、本稿が考察するV方ヲスル構文を見てみると、目的語に同じ方名詞が生起しながら、事象叙述と属性叙述の両方の解釈が可能となる。

- (2) a. 太郎は変な走り方をした。 [事象:「太郎が走る」という出来事]
b. この英文は奇妙な書き方をしている。 [属性:「この英文」がある特徴を持つ]

同じ種類の名詞が生起しているにも関わらず、事象解釈と属性解釈の両方を許容するという事実から、V方ヲスル構文の事象解釈と属性解釈の違いは何によって決まるのか、といった疑問が生じる。

この疑問に答えるため、本稿では、先行研究を概観した上で、V方ヲスル構文の解釈と構造について叙述類型論 (益岡 1987, 2000, 2008, 2018、影山 2012) の観点から考察する。

2. V方ヲスルの先行研究

方名詞を扱った論考は数多く存在し、またV方ヲスル構文の存在を指摘する研究もいくつかある (井上 1990、影山 1993、久保田 2014: 56 など)。その中でも藤巻 (2020) は、V方ヲスル構文を中心に考察した唯一の研究として注目に値する。以下では、藤巻 (2020) の観察を紹介しながら、V方ヲスル構文の統語・意味的特性について概観する。

* 本稿は、科学研究費助成事業 (若手研究 (B))(17K13446) による研究成果の一部である。

2.1. 「V方」に生起する基体動詞の特徴

まず方名詞に生起する基体動詞の特徴を見る。藤巻 (2020) が指摘するように、方名詞に生起する基体動詞は、実に多様である。自動詞 (3) や他動詞 (4) も生起するし、使役や受身の接辞、複合動詞 (5) も生起する。以下では『現代日本語書き言葉均衡コーパス (Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese)』 (以下 BCCWJ) からの実例を挙げておく。

- (3) a. 内心、自分が歯をむき出しておぞましい笑い方をしているような気がした。
- b. 変な雨の降り方をするように変な雪の降り方をしている場所もあるのでは？
- (4) a. しかも、漬け物などを中心にした塩分の多い食べ方をしている人がいまだ少なくありません。
- b. 「山出し」という言い方をすることもあるが…
- (5) a. ビルボを早死にさせたり、不幸な終わらせ方をするわけには行かない。
- b. 新聞や雑誌の連載と違って読者の反応がアクセスにも現われるし、Eメールになってすぐ戻ってくるので、どんな受けとられ方をしているのか、また何を望んでいるのか、いやでも思い知らされてしまうのです。
- c. 当時としては非常に画期的と言える文化の取り入れ方をしているし、現在でも、各地で行われる茶会にはモダンな趣向が多く見られる。

また、藤巻 (2020: 28, 35) が指摘するように、恒常的な状態を表す状態動詞や慣用句も当該構文に生起できる。なお、後者の場合は、慣用句の一部にあたる項の生起が義務的となる。

- (6) a. この山は、厳かなそびえ方をしている。
- b. その世界は、理想的なあり方をしている。
- (7) a. 太郎は、ひどい *(口の) 聞き方をした。
- b. 次郎は、気持ちの良い *(手の) 貸し方をした。

このように、V方ヲスル構文の方名詞には意味的に多様な動詞が生起するが、制限が全くないわけではない。なお、藤巻 (2020: 28) によると、方名詞自体は、「主題 [=主語] の属性として、「方」の意味が許す範囲で、動作行為の「方法」「様子」や変化における「結果状態」を表すことができる」と指摘する。従って、基体動詞は何らかの方法・様子・結果状態を表しうるものに限られる (例: ??机はここに変なあり方をした、*彼はサッカー部への妙な属し方をしている)。

2.2. 修飾語句の特性

藤巻 (2020) が挙げる V 方ヲスル構文の第 2 の重要な特徴として、方名詞の修飾語句の振舞いが挙げられる。注目すべき観察は大きく 3 つある。まず、井上 (1990: 106) や影山 (1993:

256) も指摘しているが、目的語となる方名詞には何らかの修飾語句が必須となる。

- (8) a. 花子は、*(面白い / 古い) 考え方を {する / している}。
b. この花は、*(不思議な / 美しい) 咲き方を {する / している}。
(藤巻 2020: 30, (21) より一部抜粋)

第2に、修飾語句は、目的語名詞句内部で、その主要部である方名詞と叙述関係にあると主張する。つまり、(9) の下線部が表す叙述関係が成り立つとしている (藤巻 2020: 31)。

- (9) a. 花子は、考え方が面白い。 <= 「面白い考え方をする」
b. この花は、咲き方が不思議だ。 <= 「不思議な咲き方をする」

この観察は妥当なものと思われる。特に、藤巻 (2020) では強調されていないが、「X ハ Y ガ Z ダ」という多重主語構文を使って言い換えている点は、さらに注目に値する。この点は、後述するように当該構文の属性叙述解釈の一つを規定する上で重要になる。

方名詞を修飾する修飾語句の特徴の3点目として、藤巻 (2020) は方名詞に定性制限が働き、「その」による修飾と「それ」による置き換えができないと指摘する (藤巻 2020: 32-33)。

- (10) a. * 花子は、その面白い考え方をしている。
b. * 太郎は面白い考え方をしているが、花子もそれをしている。

以上、V方ヲスル構文の方名詞を修飾する修飾語句に関して、藤巻 (2020) が指摘した (i) 修飾語句の義務性、(ii) 修飾語句と方名詞との叙述関係、(iii) 定性制限を見た。これらの特徴は、佐藤 (2003) や 影山 (2004) が論じた、いわゆる「青い目をしている」構文における振舞いと並行的であると、藤巻 (2020) は指摘する。

- (11) a. 彼女は *(澄んだ) 目をしている。 (影山 2004: 23)
b. 彼女は、澄んだ目をしている。 <= 「彼女は、目が澄んでいる。」
(藤巻 2020: 26)
c. * 彼女は {その澄んだ目 / それ} をしている。 (影山 2004: 23)

V方ヲスル構文は事象叙述と属性叙述の二つの解釈が可能であることは上述のとおりである。注意しておきたいのは、藤巻 (2020) は (i) から (iii) の特徴が、属性叙述解釈の場合だけでなく、事象叙述解釈の場合にも当てはまると考えていることである。

2.3. V方ヲスル構文の解釈と統語的振舞い

V方ヲスル構文の第3の特徴として、解釈によって統語的振舞いが異なることが挙げら

れる。藤巻 (2020) でも、V 方ヲスル構文は事象叙述と属性叙述の両方が可能であるとし、かつ動詞についてスル形式の容認性が異なると指摘する。

- (12) a. 太郎は、生まれつきおかしい笑い方を {する / している}。 [属性]
b. 太郎は、今おかしい笑い方を {#する / している}。 [事象]

(12a) では「生まれつき」という副詞によって「おかしい笑い方をする」ことが主語が恒常的に行う行為と理解され、主語のある種の属性を叙述した属性叙述文としての解釈が生じる。この場合、当該文を発話した時点で主語が「おかしい笑い方」を実際に行っていないとしてもよい。この解釈では、スル形とシテイル形で意味に大きな違いはなく、アスペクトの対立が中和されている。一方、(12b) では「今」という時間限定性をもたらす副詞によって、主語が現在笑っており、その様態が「おかしい」という叙述関係が成り立っている。この時「笑い方をしている」は「進行 (動作継続)」のアスペクト解釈となる。一方、(12b) のスル形式では属性の解釈が容認されず、事象叙述の解釈のみ得られる。この点で、スル形式とシテイル形式が対立している。

N ヲスル構文は一般に事象叙述解釈と属性叙述解釈の違いによって、統語的振舞いが異なることが知られている。藤巻 (2020) が指摘するように、V 方ヲスル構文の場合も、解釈によって統語的振舞いが異なる。具体的には、(i)「そう (する)」による代用の可否や (ii) 分裂文の叙述名詞句として方名詞が生起できるかが、当該構文の解釈によって異なる (藤巻 2020: 33-34, 一部変更)。

- (13) a. * 太郎は面白い考え方をしているが、花子もそうしている。 [属性]
b. 彼は丁寧な話し方をした。花子もそうした。 [事象]
(14) a. * 太郎がいつもしているのは、面白い考え方である。 [属性]
b. 花子はその時したのは、おかしい笑い方である。 [事象]

3. 修飾語の振舞いと V 方ヲスル構文の解釈

藤巻 (2020) の観察には、V 方ヲスル構文の分析にあたって二つの問題がある。まず、BCCWJ から採取したデータを見ると、修飾語句が方名詞と叙述関係にない事例や「この」「その」といった対象を特定する修飾語句が生起する事例が観察される。まず、方名詞と修飾語句が叙述関係にない事例には、以下のようなものがある。

- (15) a. 子どもは、親は親の生き方をしているんだなど感じ、少なくとも親に対する責任を感じなくてすむのです。 (BCCWJ LBr3_00080)
b. しかも、漬け物などを中心にした塩分の多い食べ方をしている人がまだ少なくありません。 (BCCWJ PB24_00096)

これらの例は、「XハYガZダ」形式で書き換えることができず、従って方名詞と修飾語句が叙述関係にないことは明白である。

- (16) a. * 親は、生き方が親だ。
b. * 日本人は、食べ方が、漬物などを中心にした塩分の多い。

また、次の例では、「そんな」「これら」といった定の指示的限定詞が生起しており、それぞれ破線の箇所を指している。

- (17) a. 相沢君はいつもつま先で歩いていた。[中略] 少しでも背を大きく見せたかったのか、それともそんな歩き方をしていると背が伸びるとでも思っていたのか、いつもつま先で歩いていた。 (BCCWJ PB27_00058)
b. 一方がフルタイムでもう一方が家事専念の片働きや双方フルタイムの共働きは実際にこれらの働き方をしている者より少ないのに対し… (BCCWJ OW6X_00516)

本稿では、(15) が示すように、目的語名詞句内の修飾語は、事象・属性解釈に関わらず、方名詞を叙述するだけでなく、限定する場合もあると考える。一方で、定性制限についてはコーパスからのデータを見る限り、これは5節で後述するように、特定の属性叙述解釈の場合にのみ成立するものであると主張する。

藤巻 (2020) の二つ目の、そして本稿にとってより重要な問題点として、属性の分類が明確でなく、従って属性叙述解釈がどのように成立するのか明らかでないことが挙げられる。V方ヲスル構文は、多くの場合、基体動詞Vのアスペクト特性を継承していると思われる。しかし、属性叙述の研究で明らかとなっているように、たとえ動詞述語が事象叙述を行う場合でも文全体としては属性叙述となる場合も存在する。益岡 (2008: 7) はこれを「属性叙述と事象叙述は相互に完全に分断されているのではなく、‘通路’が開いている」と表現する。従って、本来的な属性叙述なのか、事象叙述を属性叙述化したものなのかも見極める必要がある。このためには、属性の分類と性質を理解した上で、動詞述語の解釈と構文全体の解釈の両方に目を配る必要がある。

次節では、先行研究で提案された属性の分類と性質を考察し、その上で、V方ヲスル構文が取りうる属性解釈を検討する。

4. 属性の分類とV方ヲシテイル構文が表しうる属性

事象叙述と属性叙述に関する研究は、益岡隆志氏の一連の研究によって展開されて以降、様々な研究者によって盛んに議論がなされてきた (益岡 (1987, 2000, 2008, 2018) や影山 (2012) を参照)。叙述とは「現実世界を対象として表現者がおこなう概念化」と規定され (益岡 1987: 20)、その叙述は事象叙述と属性叙述の二つに類型化される。事象叙述とは、「ある

時空間に実現・存在する事象 (現象) を表現するもの」 (益岡 2000: 39) であり、時空間性を志向する。事象叙述を支えるのは出来事のタイプを表す述語、典型的には動詞述語である。一方、属性叙述とは「ある対象がある属性 (特徴や性質) を有することを表現するもの」 (益岡 2000: 39) で、対象の存在を志向するとされる。典型的には名詞や形容詞を述語とする文が属性叙述を表す。

属性叙述が表す属性は、いくつかのタイプに分類される (益岡 2008, 2018 を参照)。まず、対象が属するカテゴリを表す「カテゴリ属性 (例: 「彼は中国に詳しい人だ」) がある。また、対象が持つ性質を表す「性質属性」 (例: 「彼は中国に詳しい」) がある。これらの属性は典型的に名詞述語や形容詞述語によって表されるが、「青い目をしている」のように性質属性を本来的に表す動詞述語もある。また、事象から派生的に生じる属性もある。特定の時空間に起こった事象がそれに関係する対象の有意味な実績として理解される「履歴属性」 (例: 「彼は中国に何度も {行った / 行っている / 行ったことがある}」) と、もう一つは繰り返し事象が生じることで当該の対象が持つ習性を述べる「習性属性」 (例: 「彼はよく中国に {行く / 行っている}」「地球は一日に一回転する」) がある。前者はいわゆるパーフェクト (現在完了) 解釈であり、後者は習慣文または総称文と呼ばれる解釈である。これらの解釈の成立後に有意味な結果状態が語用論的に認められたり、事象の反復により均質的な出来事として把握されたりすることで生じる。益岡 (2008: 8) の言葉を借りると、「事象叙述述語の属性叙述化」を受けた派生的な属性である。

V 方ヲスル構文は、方名詞の基体である動詞の事象構造の特性を反映する。例えば、「嫌味な笑い方をする」であれば「笑う」と同じ動作事象を表すし、「唐突な死に方をする」であれば「死ぬ」と同じ主体変件事象、「丁寧な作り方をする」であれば「作る」と同じ主体動作客体変件事象を表す。つまり、基体動詞が事象叙述を表せば V 方ヲスルも事象叙述を表すということになる。それが属性叙述を表すのだとすれば、事象叙述述語が属性叙述化を受けて生じる履歴属性や習性属性解釈が該当すると考えられる。実際そうした用法が存在する。

- (18) a. [アンデルセンは]『スペインにて』では、「そのような服を着た女性は鐘の中
ぶら下がる舌のように見えて滑稽だ」と相手を見下した書き方をしている。

(BCCWJ PB59_00664) [履歴属性]

- b. 武術は太陽光線をレンズに集めるような体の使い方をするんです。

(BCCWJ PM42_00032) [習性属性]

これらの V 方ヲスル構文は、基体動詞が事象叙述を表し、かつシテイルのパーフェクト用法やスルの総称用法によってそれぞれ履歴属性と習性属性を表す属性叙述文になっている。

しかし、基体動詞が事象叙述を表しながらも、本来的属性とされる性質属性も表すと思われる場合が存在する。例えば、次の例文の解釈に関して、(a) の「今現在実際に彼が走って

いる」という事象叙述解釈も可能であれば、(b) のように「彼の走り方が素晴らしい」という主語の（動きの）性質を前景化した属性叙述解釈も可能である。

(19) 彼はすばらしい走り方をしている。

- a. 今現在彼が走っていて、その様がすばらしい。 [事象]
- b. 彼が今実際に走ってなくてもよいが、彼の走り方はすばらしい。
[性質属性]
- c. ?? 彼は {最近 / よく} 素晴らしい走り方で走る。 [習性属性]

(a) ではテイルが進行（動作継続）の解釈であるのに対し、(b) では「走り方がすばらしい」という属性が存在することを表しているに過ぎない。¹ つまり、話者が「彼の走り方」について下した評価を述べている。もちろん (c) のように、テイルが習慣を表す「習性属性」としての解釈も不可能ではないかもしれないが、筆者にとっては「最近」や「よく」のような頻度副詞がないと、この解釈はかなり難しい。

(19b) で興味深いのは、基体動詞が時間的展開を有する動作事象を表しながら、構文全体としては本来的な属性である性質属性を表す、という点である。これは上述したような、「V方ヲスル構文が方名詞の基体動詞の特性を反映した事象を表す」という一般化に反している。また、この解釈は、「彼女は青い目をしている」タイプの構文が表す恒常的状态、すなわち性質属性と同種の意味を表すと思われる。

以上、これまでの研究で明らかにされた属性の種類を概観した上で、V方ヲスル構文が履歴属性・習性属性のみならず性質属性も表しうることを指摘した。この解釈の多義性を説明するため、次節ではV方ヲシテイル構文の新たな分析を提案する。

5. V方ヲシテイル構文の解釈と二種類のスル

本節では、属性叙述解釈のV方ヲスル構文と事象叙述解釈のV方ヲスル構文の文構造について提案を行い、それによって各解釈による振舞いの違いを説明する。

V方ヲスル構文は、一見して分かる通り、主語名詞句、修飾語句+方名詞から成るヲ格目的語、そして動詞スルから構成される。しかし同種の構成要素が含まれていても、異なる解釈がこの構文には可能となる。これはなぜであろうか。なぜ異なる構文解釈が可能なのだろうか。本稿では、当該構文に全く異なる二種類の動詞スルが生起し、それに伴って構文の構造が異なっているためだと主張する。まず、目的語をとる動詞スルが生起する構文には多様な用法があることが知られており、またスルの意味についても研究者によって様々な見解

¹ この例文の解釈では、どちらかと言えば事象解釈が優勢である。また話者によっては、性質属性としての解釈が得られにくいかもしれない。しかし、以下の文脈であれば、当該解釈がより顕著になるのではなかろうか。

- (i) 彼って、すばらしい走り方をしているよね。

がある。それらを詳細に吟味する余裕はないが、本稿での考えを述べておくと、以下のような異なる意味をもった二つのスルが存在すると提案する。

- (20) a. 動的スル—目的語名詞句が表す事物に関する行為を行う
例：勉強をする、葬式をする、怪我をする、忘れ物をする、議長をする
- b. 静的スル—目的語名詞句が表す事物に関する属性を所有する
例：青い目をしている、面白い髪型をしている、穏やかな性格をしている

(20a)「動的スル」は、目的語名詞が表す事象、またはそれが慣習的に喚起する事象を「行う、実行する」という動的事態を表す。一方、(20b)「静的スル」は目のような身体部位だけでなく、髪型や性格のような主語への所属物一般を目的語としてとり、その所属物を通して修飾語が表す属性を主語が所有していることを述べる機能を果たす。動的スルは目的語名詞から事象を取り出すスルで、静的スルは属性を取り出すスルだと言える。

また、動的・静的スルは、目的語名詞句が果たす文中での役割が全く異なる。動的スルは、目的語名詞句が表す、または喚起する出来事を対象として、主語がそれを「行う」あるいはその行為を制御する立場にあるという他動詞的事態を表す。従って、目的語名詞句は概念的に独立した事物を表すことになる。このため、(13b)(14b)のように「そう」「それを」による代用や分裂文の焦点位置への生起のような統語的振舞いが可能であり、また(17)で指摘したように定性制限が働かず、特定の出来事や行為を表してもよい。

一方、静的「スル」の目的語に生起するのは、主語に帰属する所属物に限られる。これは「青い目をしている」構文などの属性叙述構文の研究で一般に認識されている事実である(佐藤 2003, 影山 2004)。ここで重要なのは、スル自体は安定した状態、すなわち属性の所有を表す動詞として機能している点である。いわば、属性叙述に特化した構文形式であり(久保田 2014: 59)、(11b)で見たように、「XハYガZダ」という属性叙述を表す多重主語構文で書き換えが可能である。また、属性の所有という事態は、基本的に恒常的な状態と等価であるから、従来の日本語アスペクト研究で了解されてきたように、アスペクト解釈におけるスル—シテイルの対立が成立しない。この特徴は本来の他動詞としてのスルからは予測できない例外的な特徴であり、独立した用法として認める必要がある。

また、静的スルの場合、「XハYガZダ」の「YガZダ」にあたる内容を目的語名詞句が表す。影山(2004)が主張するように、「青い目をしている」の目的語「青い目」は、主語に対する属性叙述を行う述語の一部として、重要な役割を果たしていると考えられる。述語の一部であるから、(13a)(14a)のように統語的独立性もない(影山 2004: 28)。

静的スルと目的語名詞句が述語として機能するには、もう一つ重要な条件がある。それは、目的語主要部名詞が主語の譲渡不可能な所有物を表すことである。身体部位や「髪型」のような外見的特徴、「性格」のような内面的特徴も一種の譲渡不可能所有物とみなすことができる。これらを表す名詞は、Nヲスル構文において、主語と譲渡不可能な所有関係にある。

以上の動的スルと静的スルの二分類に基づき、V方ヲスル構文も、動的スルが生起する場

合と静的スルが生起する場合があると考え。動的スルの場合、「V方」が基体動詞の表す事態を喚起し、スルと共起することでその事態が生じることを含意する。一方で、静的スルの場合「V方」は、主語の譲渡不可能所有物としてみなすことができる。実際「彼らしい走り方」「彼女独特の髪のかきあげ方」のように、方名詞は人物を特徴づけるような、特定のサマを表すことができる。また、目的語名詞句は、その内部で叙述関係が成立し、静的スルと共起することで一種の述語として機能する。このため、藤巻 (2020) が観察したように、属性叙述を表す「XハV方ヲスル」は「XハV方ガ…」とほぼ同じ意味を表すのである。

(21) a. [太郎は [[面白い笑い方]をしている]]。 b. [太郎は [笑い方が面白い]]。

(21b) では、「笑い方」が「太郎」のどの側面が「面白い」のかを特定する働きをしており、それを「面白い」という述語が叙述する。さらに「笑い方が面白い」という部分が主語を叙述する述語としても機能する。同様のことが (21a) の V方ヲシテイル構文にも当てはまる。つまり、「面白い」が「笑い方」を叙述し、さらに「面白い笑い方をしている」が主語を叙述する。このように「V方+静的スル」においては二重の叙述関係が成立するのである。

以上述べた二つのスルの性質と V方ヲスル構文の構造を図示すると、次のようになる。

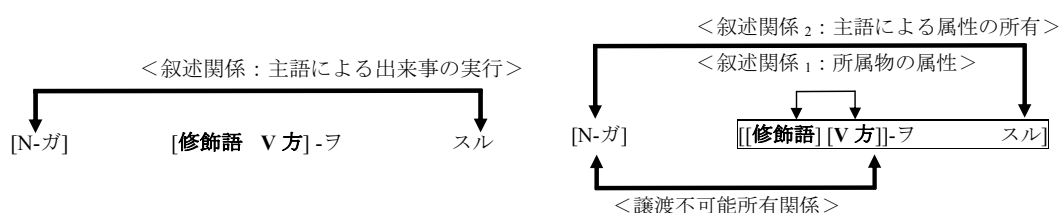


図1 動的スルのV方ヲスル構文の構造

図2 静的スルのV方ヲスル構文の構造

次に、上述のスルの二分類と構造的差異に基づき、V方ヲスル構文の属性叙述解釈とその振舞いの対応について見る。まず、履歴属性と習性属性は事象叙述から派生する属性であるから、事象叙述解釈同様、スル自体は動的事態を表し、統語的にも似た振舞いを示すと予想される。事実、これらの場合には定性制限が課せられず、「それ」による代用も可能である。

(22) a. 彼はその走り方をしたことがある。彼女もそれをしたことがある。[履歴属性]
 b. 恵はその笑い方をよくする。結愛もそれをよくする。 [習性属性]

一方、V方ヲスル構文が性質属性を表す場合には、二つの場合が存在する。一つは (6) で見た、恒常的状态を基体動詞が表す場合、もう一つは (19b) で見た、基体動詞が動的事態を表しても構文全体では属性の所有を表す場合である。これらは「青い目をしている」と同様、静的スルが生起し、定性制限が課されるとともに目的語名詞句を「それ」で代用できない。

- (23) a. * この山はこの厳かなそびえ方をしている。
 * その世界は理想的なあり方をしている。あの世界もそれをしている。
 b. # 山田選手って、このすばらしい走り方をしているね。
 # 山田選手って、すばらしい走り方をしている。佐藤選手もそれをしている。

以上の考察から、V方ヲスル構文の属性叙述解釈のうち、事象叙述述語を属性叙述化した履歴属性と習性属性は動的スルが生起する構造を、性質属性を表す場合は静的スルが生起する構造をもち、両者は統語的に異なる構造をもつことが明らかとなった。

6. 結論

本稿では、V方ヲスル構文の解釈について先行研究の観察を踏まえながら考察してきた。V方ヲスル構文は事象叙述解釈と属性叙述解釈の両方が可能であるが、属性叙述解釈については表される属性によって、統語・意味構造が異なると主張した。V方ヲスル構文の基盤となるのは、二つの異なる種類の動詞スルであり、両者は主語との叙述関係をはじめとして異なる構造をもつ。また、属性叙述解釈のうち、習性属性と履歴属性の場合は、基体動詞の特性を反映した動的スルが事象を表し、それが属性叙述化されることで属性解釈を生じさせる。一方、性質属性解釈では、基体動詞が恒常的な状態を表す場合と、静的スルが内部に叙述関係が成立する目的語名詞句と共起することで、基体動詞のアスペクト特性を覆して属性解釈が可能となる場合の二つが存在することを示した。

参考文献

- 藤巻一真 (2020) 「名詞化接辞「方」に於ける問題」 *Scientific Approaches to Language 2*: 1-24, 言語科学研究センター, 神田外語大学.
- 井上優 (1990) 「接尾辞「~方」について」『日本語学』9: 101-111.
- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』ひつじ書房.
- 影山太郎 (2004) 「軽動詞構文としての「青い目をしている」構文」『日本語文法』4-1: 22-37.
- 影山太郎 (2012) 「属性叙述の文法的意義」影山太郎 (編)『属性叙述の世界』3-35, くろしお出版.
- 久保田一充 (2014) 『日本語の出来事名詞とその構文』名古屋大学大学院博士論文.
- 益岡隆志 (1987) 『命題の文法』くろしお出版.
- 益岡隆志 (2000) 「属性叙述と事象叙述」益岡隆志 (編)『日本語文法の諸相』39-53, くろしお出版.
- 益岡隆志 (2008) 「叙述類型論に向けて」益岡隆志 (編)『叙述類型論』3-18, くろしお出版.
- 益岡隆志 (2018) 「日本語文論からの課題提起—叙述類型論の事例—」 *Journal of Culture and Information Science* 13-1, 13-2: 98-104.
- 佐藤琢三 (2003) 「「青い目をしている」型構文の分析」『日本語文法』3-1: 19-34.

Glad の意味についての一考察

坂場 大道

1. はじめに

人間が持つ感情は、様々な分類が試みられてきた。日本語では「喜怒哀楽」という4分類もあるが、*anger, disgust, fear, happiness, sadness, surprise* のような7分類もある (Ekman 1992)。他方、語彙のレベルでは、上記の分類を遥かに超える数の感情を表す表現がある。例えば、「喜怒哀怖恥好厭昂安驚」の10種に感情を分類する感情表現辞典 (中村 1993) では、「喜」を表す語句として、「嬉しい」「幸せ」「喜ぶ」などの200以上もの表現を掲載している。

このように感情は様々な方法で分類されてきた一方、個々の語彙が表す意味の違いにはあまり関心が向けられてこなかった。感情を表す語彙を包括的に考察する数少ない研究の1つに Wierzbicka (1999) がある。同研究は、感情の7分類では *happiness* として一括されるような、英語の *joy, happy, contented, pleased, delighted, excited, hope, relieved* などの各語がそれぞれ異なる意味を持ち、感情の概念化の仕方において異なることを示した。しかし、感情語彙を広く扱う同研究には肯定的感情を表す語彙に *glad* が含まれておらず、その理由も述べられていない。¹大規模英語コーパス British National Corpus (BNC) の100万語ごとの使用頻度によると、*glad* は他の語よりも頻繁に用いられている (*glad* (38.27) > *joy* (28.99) > *delighted* (28.02) > *excited* (18.3) > *relieved* (16.36) > *contented* (3.52))。²

上記の理由から、本研究は *glad* の意味を考察する。また、Wierzbicka (1999) と同様に Natural Semantic Metalanguage (NSM) 理論に基づく *glad* の試案の定義を提示することで、先行研究で提示される他の肯定的感情語彙が表す感情との共通点および相違点を明らかにする。2節では NSM 理論の概要を示し、肯定的感情を表す語彙の先行研究を参照する。3節は *glad* の試案となる定義を提示し、4節で結語および今後の課題について述べる。

2. 先行研究

本節では、2.1 で Natural Semantic Metalanguage (NSM) 理論を概観し、2.2 で同理論に基づいて提示された Wierzbicka (1999) の肯定的感情を表す語彙の定義を参照する。2.3 では *glad* の意味について言及がある先行研究を概観する。

2.1 Natural Semantic Metalanguage (NSM)

Natural Semantic Metalanguage (NSM) (Wierzbicka 1999) とは、Semantic Metalanguage という名の通り、「意味」を記述するための分析枠組みであり、「言語」の意味を記述するた

¹ 守田 (2013) にも同様な指摘が見られる。

² 残りの2語の使用頻度は *glad* よりも高い (*hope* (174.6) > *happy* (115.1) > *glad* (38.27))。

めの「言語」である点において「メタ」言語である。Natural という言葉が示すように、NSM は「自然」言語から構成される。公式や特殊な用語などの「人工」言語を扱う理論とは対照的に、NSM は既存の言語のうちの、非常に限られた語彙をメタ言語として用いる。³ 英語の NSM では、以下の大文字で表記された約 65 個の概念のみ使用が許される。

Substantives:	I~ME, YOU, SOMEONE, SOMETHING~THING, PEOPLE, BODY
Relational substantives:	KIND, PARTS
Determiners:	THIS, THE SAME, OTHER~ELSE
Quantifiers:	ONE, TWO, SOME, ALL, MUCH~MANY, LITTLE~FEW
Evaluators:	GOOD, BAD
Descriptors:	BIG, SMALL
Mental predicates:	KNOW, THINK, WANT, DON'T WANT, FEEL, SEE, HEAR
Speech:	SAY, WORDS, TRUE
Actions, events, movement, contact:	DO, HAPPEN, MOVE, TOUCH
Location, existence, specification:	BE (SOMEWHERE), THERE IS, BE (SOMEONE)'S, BE (SOMEONE / SOMETHING)
Life and death:	LIVE, DIE
Time:	WHEN~TIME, NOW, BEFORE, AFTER, A LONG TIME, A SHORT TIME, FOR SOME TIME, MOMENT
Space:	WHERE~PLACE, HERE, ABOVE, BELOW, FAR, NEAR, SIDE, INSIDE
Logical concepts:	NOT, MAYBE, CAN, BECAUSE, IF
Intensifier, augmentor:	VERY, MORE
Similarity:	LIKE~WAY~AS

(表 1. 英語の semantic primes 一覧 Goddard and Wierzbicka 2014)⁴

表 1 の右側に記載された概念は、それよりも簡単な概念に分解できない意味元素であり、これまでの 30 言語以上の調査から、すべての言語に普遍的に存在すると考えられている。普遍であるのは「語」ではなく、「概念」である。すなわち、表 1 の概念はあらゆる言語において、何らかの形式で語彙化されている。語彙化の方法は言語によって異なり、オーストラリアの諸言語のうちの一つでは、BECAUSE にあたる概念は接辞尾で表される。

意味元素の一覧は、英語以外にも日本語版を含む約 30 以上の言語で展開されている。英語の NSM に基づく先行研究を参照する本研究では、英語版のリストを用いる。また、表 1 の意味元素は自由に用いられるわけではなく、個々の組み合わせ方に制限がある。以下は、意味元素の一つである FEEL において許される組み合わせである。

(1) someone FEELS like this

³ 自然言語を用いる背景には「あらゆる形式化は自然言語に依存する」という以下の Lyons の考えがある。
“[A]ny formalism is parasitic upon the ordinary use of language, in that it must be understood intuitively on the basis of ordinary language” (Lyons 1977: 12)。

⁴ 意味元素のリストは通言語的な調査に基づき数回更新されており、表 1 は 2021 年現在の最新版である。

someone FEELS something (good / bad)

someone FEELS something (good / bad) toward someone else⁵

このような組み合わせの厳しい制限によって、特定の言語における自然さを犠牲にせざるを得ないことがある。自然な英語では、動詞 *feel* は *good* などの形容詞が後続することが一般的である。しかしながら、この組み合わせは一部の言語において許されていないため、*feel something good* のように、*something* を間に挿入する必要がある。

NSM 理論は様々な領域に応用されており、感情語彙に関する通言語的な研究では、様々な種類の感情について明らかにされてきた (Wierzbicka 1999; Harkins and Wierzbicka 2001; Goddard and Wierzbicka 2014)。近年では、類似した意味を持つ概念をその定義に反映させるための雛形である *semantic templates* が提案された。以下は、英語の感情を表す形容詞をコンピュータと共に用いた文 (例: *Someone X was happy.*) のテンプレートである。文が表す意味として、時系列順に並べられた (a) から (c) の3つの意味要素が提示されている。

(2) Semantic template for English emotion adjectives with verb ‘to be’;

Someone X was happy, angry, sad, ... (at this time)

a. this someone thought like this at this time:

b. “ _____
_____ ”

[model thought]

c. because of this, this someone felt something (very) good / bad

[feeling]

like people often⁶ feel when they think like this

[typicality]

(Goddard 2018: 72)

(2) は、感情が生起する過程について述べている。(2a) は、当該の人が漠然と思考している (‘*thought like this*’ であり、‘*thought exactly this*’ ではない) ことを示す。(2b) は思考の内容に相当し、[*model thought*] または [*prototypical cognitive scenario*] と呼ばれる。“*prototypical*” であるのは、(2c) に含まれる ‘*often*’ が示すように、すべての場合において必ずしもそうではないからである (Goddard 2018: 75)。*[feeling]* および [*typicality*] と呼ばれる (2c) は、[*model thought*] のように考えた人がしばしば感じるように、何かしらの感情を抱くことを示す。

英語の感情を表す形容詞は、概して (2) に示す概念構造を持ち、意味要素 (a) は共通している (Goddard 2018)。本研究が参照する肯定的感情を表す語彙は、意味要素 (c) も ‘*feel something good*’ で共通しているため、意味要素 (b) において違いが示されている。次

⁵ これら3つのパターンに加え、NOTやCANも組み合わせることができる。

⁶ (2) の ‘*often*’ は表1の意味要素ではないが、ここでは ‘*at many times*’ の略語として用いられている。

節では、感情に関わる NSM 研究の中でも、感情語彙を包括的に扱う Wierzbicka (1999) を参照する。

2.2 NSM に基づく感情語彙の分析

Wierzbicka (1999) によって定義が提示された当時は、2.1 のテンプレート開発前かつ、意味元素のリスト改訂前である。本研究では、Wierzbicka (1999) をもとにテンプレートおよびリストの改訂を反映させた Goddard (2018) を参照する。とりわけ、*glad* の定義の比較対象として重要と考えられる *happy* および *pleased* の定義を取り上げる。(3) と (4) は、*happy*⁷ および *pleased* の定義であり、両語の意味の違いは意味要素 (b) に示されている。

(3) *He was happy (at that time):*

- a. this someone (= he) thought like this (at that time):
- b. “many good things are happening to me now as I want
I can do many things now as I want
this is good” [model thought]
- c. because of this, he felt something good [feeling]
like people often feel when they think like this [typicality] (Goddard 2018: 85)

(4) *He was pleased (at that time):*

- a. this someone (= he) thought like this (at that time):
- b. “something good happened before
I wanted this” [model thought]
- c. because of this, he felt something good [feeling]
like people often feel when they think like this [typicality] (Goddard 2018: 77)

まず、(3b) の ‘many good things are happening to me’ と (4b) の ‘something good happened before’ の違いを確認する。*happy* の意味特徴を説明する例として Goddard and Wierzbicka (2014: 102) では、以下の文章が引用されている。

- (5) He would rise, grab a pair of track-pants [...] and then perform a series of nine stretches, each of which he would hold to a count of thirty. [...] Then he’d go to the kitchen and switch on the coffee percolator before walking to the milk bar at the end of the street to

⁷ NSM では、*happy* の意味は多義と見なされる。例えば、‘I’m happy with my job’ という文は *happiness* を示さないという理由から、*happy with* の定義は *happy* の定義とは別に提示されている (Goddard and Wierzbicka 2014: 121)。本研究は、テンプレートの形式で用いられた場合の *happy* の意味を取り上げる。

buy the newspaper and a packet of cigarettes. Back home, he would pour himself a coffee, walk out on the back verandah, light a smoke, turn to the sports pages, and begin to read. In that moment, with the newspaper spread before him, the whiff of bitter coffee in his nostrils, the first hit of strong tobacco smoke, whatever the miseries, petty bullshits, stresses and anxieties of the day before or the day ahead, none of it mattered. In that moment, and if only in that moment, he was **happy**.

(Christos Tsiolkas, *The Slap*) (太字は筆者)

文章中の *he* と呼ばれる人物の人生は、決して順風満帆とは言えない。しかし、否定的な事柄について思考を巡らせず、自分の身に起きている肯定的な事柄に意識を集中させているこの瞬間、彼は *happy* と感じている ('many good things are happening to me')。

この意味要素は、*happy* が *pleased* より「一般的」な感情であることを示す (Wierzbicka 1999)。例えば、感情の誘因が一つに定まらず、*here* や *today* などの場所や時間によって示唆される場合、*happy* とは共起可能だが、*pleased* とは共起しにくい (= (6a, b))。

(6) a. I am {happy / ? pleased} here.

b. I feel {happy / ? pleased} today.

(Wierzbicka 1999: 56)

pleased は 'I'm pleased to hear about your news' のような特定の事態に対する反応 ('something good happened before') として用いられやすい。他方、*happy* は感情主体が自身の状況に対して起きている肯定的な事柄に意識を向けた、より一般的な評価 ('many good things are happening to me') と言える。

次に、(3b) の 'to me' の意味要素は、*happy* の感情主体が感情の誘因事態を「自分ごと化」していることを示す。例えば、昇進した同僚に 'I am happy' と発言した場合、その発話者は同僚に自分を重ね合わせ、その事態を自分にとって良いこととして捉えている ('to me')。他方、'I am pleased' と言った場合は、その人物は「いいことが起こった」 ('something good happened') と捉え、そのような特定の事態の発生を望んでいたこと ('I wanted this') が含意される (Wierzbicka 1999: 56)。

最後に、(3b) の 'as I want' および 'I can do many things now as I want' の意味要素は、*happy* の感情主体が、多くの事柄を自分の望み通りにできると考えていることを示唆する。これらの意味要素は、「物事が自分の思い通りになっている」と感じる点で *freedom* という概念と密接な結びつきがある (Goddard and Wierzbicka 2014)。Kövecses (1991: 31) も、"when we are free, we are happy" という一般的な考えがあることを指摘している。

上記の理由に基づき、*happy* および *pleased* の定義が提示されている。次節では、3 節で NSM を用いた *glad* の定義を提示するため、*glad* の意味に関する先行研究を参照する。

2.3 Glad に関する先行研究

Glad の語の意味を中心に据える研究は非常に少ない。本節では、感情語彙を広く扱う 2 つの先行研究において、*glad* に言及がある箇所を取り上げる。第一に、Johnson-laird and Oatley (1989: 96) は、感情を 7 種類 (0. Generic emotions, 1. Basic emotions, 2. Emotional relations, 3. Caused emotions, 4. Causatives, 5. Emotional goals, 6. Complex emotions) に分け、感情を引き起こす事態を要求する Caused emotions に *glad* を分類している。その根拠として、Basic emotions に分類される *happy* とは異なり、*glad* は感情の理由が不明であることを示す表現と共起しにくい (= (7a, b))。代わりに、「冬の終わり」のような感情の誘因を表す表現と用いられることが一般的である (= (8))。

- (7) a. I am happy but I don't know why.
b. ?? I am glad but I don't know why. (Johnson-laird and Oatley 1989: 100)
- (8) I am glad that winter is over. (Johnson-laird and Oatley 1989: 100)

Bolinger (1984: 150) によると、*glad* は “pure feeling of gladness” を指示できない。すなわち、感情をただ感じることはできず、その原因に投射される (“the emotions are not merely felt, but projected on their cause”) 必要がある (Bolinger 1984: 52)。例えば、感情主体がその日に漠然と感じる感情を表す語として *upbeat* は容認されるが (= (9a))、*glad* はその原因が示されていないために容認されない (= (9b))。

- (9) a. She is feeling very upbeat today.
b. * She is feeling very glad today. (Bolinger 1984: 52)

このように、*glad* という語を用いるには、その原因が共起する必要がある事が指摘されてきた。3 節では上記の *glad* に関する先行研究から得られるデータに加え、コーパスでの具体例を検討することで、*glad* の意味を考察し、NSM を用いた定義を試みる。

3. Glad の意味分析

本節では、*glad* の意味について考察する。特に、意味が類似している *pleased* および *relieved* との比較から、それらの感情の概念化の仕方の違いを明らかにする。以下では、NSM に基づく *glad* の定義の試案を提示した後、各意味要素がどのような意図で提示されているかを、その根拠となる *glad* の用法から確認する。以下の (10) が、本研究が提案する *glad* の試案となる定義である。意味要素 (a, c) は英語の感情を表す形容詞のテンプレートと共通している。

(10) *He was glad (at that time):*

- a. this someone (= he) thought like this (at that time):
b. “something good happened before
I wanted this
if it didn’t happen like this, I would feel something bad” [model thought]
c. because of this, this someone felt something good [feeling]
like people often feel when they think like this [typicality]

(10a, c) は感情主体が漠然と思考しており (= a)、結果として肯定的な感情を経験することを示す (= c)。以下では、意味要素 (b) について議論する。

第一に、‘something good happened before’ および ‘I wanted this’ は、先行研究の *pleased* の定義と共通している。‘something good happened before’ は 2.3 の *glad* の先行研究とも関連している。以下再掲の例が示すように、*glad* は感情を引き起こす誘因が読み込みにくい場合は容認されず (= (11a))、「冬の終わり」のような具体的な原因を要求する (= (11b))。

- (11) a. * She is feeling very glad today. (Bolinger 1984: 52)
b. I am glad that winter is over. (Johnson-laird and Oatley 1989: 100)

このような感情の誘因を要求する側面は、感情を引き起こす事態の発生を前提とすると言い換えられ、NSM では *pleased* と同様に特定の事態に対する反応 (‘something good happened before’) として捉え直すことができる。同時に、そのような特定の事態の発生を望んでいたこと (‘I wanted this’) が含意される。

pleased との唯一の違いである ‘if it didn’t happen like this, I would feel something bad’ という意味要素は、発生を期待していたような良い事態が発生していなければ、むしろ悪い感情を抱いていたという含意が *glad* にはあることを示す。この含意の違いについて、*glad when* と *pleased when* に後続する節の内容の比較を通じて検討する。BNC コーパスにおいて、前者は 92 件、後者は 93 件とほぼ同数の例が確認される。本研究では、この含意の違いについて前後の文脈から把握できる例に絞って考察する。

以下の *glad when* を含む 3 つの文では、期待していた事態の発生によって肯定的な感情を抱いているが、その事態は望ましくない事態の終了を伴っている。従って、もしその事態が発生していなければ、感情主体にとって不都合な状態になっていたことが含意される。

- (12) She hated her work in the coffee-house, standing all day long at the sink in the ill-ventilated pantry. She was **glad when** her work was done and she could walk back to the farm, filling her lungs with the keen moorland air. She cherished those walks.

- (13) Ianthe was **glad when** the woman and her child got out at the next station, for not only did she find the conversation embarrassing but she also wanted to think about the moments before her unexpected meeting with Agnes Dalby — moments which she had so far had no chance of reliving or considering.
- (14) Staff members said things like: ‘God, I’ll be **glad when** this term’s over,’ and ... ‘If this term lasts another day, I’ll be dead ... I mean dead!’ (BNC) (太字は筆者)

(12) では、換気の悪い状況で立ちっぱなしという過酷な仕事の終わり、(13) は間の悪い会話の終わり、(14) では大変な学期の終わりが *glad* と並行している。それぞれの感情主体は、期待した事態の発生によって肯定的な感情を抱くだけでなく、彼らが身を置いていた望ましくない事態が好転していなければ、不都合が生じていたことも含意されている。

次に、*pleased when* に後続する節では、*glad* と同様に、期待した事態の発生による肯定的な感情を抱いている。他方、望ましくない事態の終了は伴わず、その事態が発生していなかった場合に生じる不都合についての含意はあまり見られない。むしろ、以下の3例のように、期待していた事態が発生していなくとも問題がないような例が確認される。

- (15) On 10 March 1952 his mother died. According to Ricky Stride, he did not greatly grieve. He had always been **pleased when** she had called on him in London but made little effort to visit her in Carshalton. He was at this stage in his life too disinclined to indulge in retrospection and perhaps too self-absorbed to consider his mother’s life and death in the context of his own life.
- (16) John, one of the PPLs at our flying club, had made a beautiful job of building his little Jodel and I had followed his progress closely over the several years it had taken him to complete it. I was **pleased when** he asked me to do the test-flying programme for him and I had no qualms in agreeing, as I knew him to be a meticulous engineer.
- (17) That evening Marilla ran round to Rachel Lynde’s house. ‘Rachel, please help me! Anne says she won’t go back to school. What am I going to say to her?’ Mrs Lynde already knew about Anne’s troubles at school, and she was always very **pleased when** people asked her to help. She smiled and sat back comfortably. ‘I’ve had ten children myself, so I know all about them,’ she said. (BNC) (太字は筆者)

(15) の感情主体は、今は亡き母からの訪問によって肯定的な感情を抱いていた。しかし、自分のことに没頭していたために母を気遣っておらず、その訪問がなくても彼に問題があったようには思えない。(16) では努力を見続けていた人からテスト飛行を依頼され、それによって肯定的感情を抱いている。しかし、その依頼がなかったことで問題が生じるといふ含意は見られない。(17) では不登校の子供の対処法について助けを求められることを

歓迎しているが、この事態が発生しなくても感情主体に不都合はない。 *glad* とは異なり、*pleased when* に後続する節では、望ましくない事態の終了を伴わない。

glad は望ましくない事態を回避する点において、オックスフォード現代英英辞典等がその類義語として挙げる *relieved* と意味が類似している。最後に、この *glad* と *relieved* の違いについて検討する。まず、Ortony, Clore and Collins (1988) に基づいて提案された Wierzbicka (1999) による *relieved* の定義を確認する。以下は Wierzbicka (1999: 58) をもとにテンプレートおよび意味元素のリストの改訂を反映させたものである。

(18) *He was relieved (at that time):*

- a. this someone (= he) thought like this (at that time):
- b. “something bad would happen
I felt something bad because of this
I know now: this bad thing will not happen” [model thought]
- c. because of this, this someone felt something good [feeling]
like people often feel when they think like this [typicality]

(18) は、*relieved* の感情主体が「何か悪いことが起こる」という予感を抱き、それを理由に不快な気持ちになっていたが、その悪い事態が発生しないとわかった結果、肯定的感情を抱いたことを示す。(10) の *glad* の定義と比較すると、*relieved* は悪い予感が先立ち、それによって不快な気持ちを抱く点において異なる。以下の *relieved* と *glad* をともに含む (19) では、この違いが反映されている。

- (19) [E]everything’s all dark and dirty. There’s a horrible smell like a garage, and I’m scared. Then I see the way out. There’s a gap in the wall, and it goes right onto the platform — there ain’t no fence or nothing stopping me getting out. I’m real **relieved** when I see that, and head straight for the gap. I feel much better when I’m back on the platform, and I sit down for a breather. That was horrible in there, getting lost and that. I’m real **glad** to be out of that place. (Nigel Watts, Billy Bayswater) (太字は筆者)

ひどい暗闇に閉じ込められた (19) の感情主体は、脱出を図っている。出口を見つけた時に感じた *relieved* は、暗闇で抱いた悪い予感 (‘something bad would happen’) によって不快な気分になりながら (‘I felt something bad because of this’)、その予感が現実にならないことを理解し (‘I know now: this bad thing will not happen’)、肯定的感情を抱いたことを示す。他方、脱出後に生じた肯定的感情を表す *glad* は、脱出という期待した事態の発生 (‘something good happened before, I wanted this’) と同時に、脱出できていなかったら不都合が生じていた (‘if it didn’t happen like this, I would feel something bad’) ことが含意される。

このように、本節ではNSMを用いて *glad* を定義することで、*pleased* や *relieved* と意味的に共通する側面を持ちながら、感情の概念化の仕方において異なることを示した。

4. 結語と今後の課題

本研究は、NSMに基づく *glad* の試案となる定義を提示することで、*pleased* や *relieved* によって表される肯定的感情との共通点および相違点を検討した。今回は *glad when* に後続する節などから、テンプレートに従う形式での *glad* の意味を考察したが、“Would you give me a hand?” などの助けを求める依頼に対する返事としての “I’d be glad to” のような表現では、本研究が主張する ‘if it didn’t happen like this, I would feel something bad’ という含意があるかは疑わしい。テンプレートとは異なる形式で用いられた場合の *glad* の意味や、*glad* の多義性については、今後の研究の課題としたい。

参考文献

- Bolinger, Dwight (1984) “Surprise”, in Lawrence J. Raphael, Carolyn B. Raphael and Miriam R. Valdovinos (eds.), *Language and cognition: Essays in honor of Arthur J. Bronstein*, 45-58, New York / London: Plenum Press.
- Ekman, Paul (1992) Are there basic emotions? *Psychological Review*. 99 (3): 550-553.
- Goddard, Cliff (2018) *Ten lectures on Natural Semantic Metalanguage: Exploring language, thought and culture using simple, translatable words*. Leiden: Brill.
- Goddard, Cliff and Anna Wierzbicka (2014) *Words and meanings: Lexical semantics across domains, languages and cultures*. Oxford: Oxford University Press.
- Harkins, Jean and Anna Wierzbicka. (Eds.) (2001) *Emotions in crosslinguistic perspective*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Johnson-laird, Philip, and Keith Oatley (1989) The language of emotions: An analysis of a semantic field. *Cognition and Emotion*, 3: 81-123.
- Kövecses, Zoltan (1991) Happiness: A definitional effort. *Metaphor and Symbolic Activity* 6 (1): 29-46.
- Lyons, John (1977) *Semantics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 守田貴弘 (2013) 「意味的分類の科学的妥当性」 『言語研究』 144: 29-53.
- 中村明 (1993) 『感情表現辞典』 東京: 東京堂出版.
- Ortony, Andrew, Gerald Clore, and Allan Collins (1988) *The cognitive structure of emotions*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Wierzbicka, Anna (1999) *Emotions across languages and cultures*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.

データ資料

The British National Corpus [BNC] (<http://corpus.byu.edu/bnc/>).

if+will 条件文における形式・意味機能に関する考察*

瀬戸 義隆

1. はじめに

英語の条件文は (1a) のように、if 節内の述語は後方転移 (backshift) が生じた現在形で示され、(1b) のように if 節内に ‘will’ が生じると、容認性が低下することが多い (Dancygier and Sweetser 2005: 83)。

- (1) a. If he’s better tomorrow, he’ll go to the show.
b. * If he’ll be better tomorrow, he’ll go to the show. (ibid: 83)

しかし、次の例のように、if 節内に will が生じる例も存在している。このような例は周辺のだが、用例数としては少なくない。

- (2) a. If Joe will help you, you can finish today.
b. We’ll double your fee if you’ll make this a priority ... (ibid: 84)

このような if 節内に will を伴う条件文 (if+will 条件文) の機能と制約については多くの考察がなされている (e.g. Dancygier 1998: 116-120, Dancygier and Sweetser 2005: 81-89, Fillmore 1990, 吉良 2018: 60-84)。本研究では、if+will 条件文の前件と後件内に生じる主語および述語の性質をコロストラクション分析 (collostructional analysis; Gries and Stefanowitsch 2004, Stefanowitsch and Gries 2003) を用いて検討し、それらの前件と後件に密接に結びついた意味的性質が存在すると論じる。

2. if+will 節の機能と制約

英語条件文の if 節で ‘will’ が生起する例は周辺的であり、通常、if 節内の述語は後方転移 (backshift) された現在形で示されることが多い (Dancygier and Sweetser 2005: 83)。Leech (2011: 64) は if 節に生起する ‘will’ の用法を意志 (volition) と、予測 (prediction) に分類する。

- (3) a. If you’ll (i.e. ‘are willing to’) come this way, I’ll show you some of our latest products.
b. If you’ll be alone at the New Year, just let us know about it.
c. If you are alone this New Year, just let us know about it. (ibid: 64)

*本研究は JSPS 科研費 JP 19K13189 の助成を受けたものです。

(3a)は ‘be willing to’ という形式で言い換え可能であることが示すように ‘will’ は意志を示すのに対して、(3b)の例は予測の意味を示す。if+will 条件文である(3b)と、前件に後方転移が生じている(3c)では意味の違いが存在し、(3b)は、“If you can predict *now* that you will be alone at the New Year, let us know about it *now* (or at least before the New Year.)”と 言い換え可能であると Leech は説明する。この用例の前件では発話者の発話時での予測が示されており、‘will’はこの予測を示す標識としての機能を示す。この文は、聞き手がこの発話を聞いた時点で新年を独りで過ごすことが予測される場合は、そのことを伝えるように依頼するものであると解釈される。それに対して、(3c)は ‘If, at the New Year, you find yourself alone, let us know about it *at that time*.’と 言い換えられると Leech は述べている。この場合、独りであることを知らせるのは、新年を独りで過ごしていると分かった時点である。

(3b)のように予測用法の ‘will’ が if 節に生起する場合、一定の制約がある。(1a)の前件では、「彼の調子が明日、改善する」という出来事が仮定されており、主語に示される参与者(‘he’)の意志では制御出来ない事態を示している。この場合、if 節に ‘will’ が生起する場合、予測用法の意味を示すと予期されるが、(1)に示されるように、そのような例は容認されない。

このような ‘will’ の振る舞いには、if 節内の ‘will’ の性質と後件に示される形式の相互作用の関連性が指摘されてきた (Dancygier 1998: 117, Dancygier and Sweetser 2005: 81-88)。彼女らは、この背景には後件での予測の有無が関連しており、後件に予測の意味が示されない場合(非予測条件文; non-predictive conditionals)、if 節には予測用法の ‘will’ が生起可能で、後件に予測の意味が示される場合(予測条件文; predictive conditionals)は ‘will’ が生起不可能であると説明する。これに基づくと、予測を示さない命令形述語を後件に含む(2b)の前件に予測用法の ‘will’ を含み、後件が予測の意味を示す(1b)の容認性の低さが説明される。それに対して、非予測条件文では、以下の例のように、if 節に予測用法の ‘will’ が生起しても問題はない。

- (4) a. If he gets better by tomorrow, I won’t cancel our theater tickets.
b. If he’ll get better by tomorrow. I won’t cancel our theater tickets.

(Dancygier and Sweetser 2005: 88)

Dancygier & Sweetser は(4a)が「明日までに彼の状態が良くなった」という前件に述べられる仮想世界で、発話者が「自分は演劇のチケットをキャンセルしない」という予測を行う予測条件文であるのに対して、(4b)は「彼の状態が良くなるであろう」という予測を表した上で、後件をその予測に関して発話者の発話時現在の決意を述べる非予測条件文として分類する。if+will 節の機能として既知情報 (Comrie 1982, 1986)、発話行為についてのコメント (Haegeman and Wekker 1984)、ネガティブ・ポライトネス (Brinton 2008: 182) などが提案されている。吉良 (2018: 74) はこのような if+will 条件文の後件には発話時の判断、意志表明、決意、提案、助言、注意喚起が示されることが多いと述べている。

Fillmore (1990) は、if 節で示される事態が対話への参与者もしくは、対話に関連する個

人の願望 (wish)を示す場合、if 節に‘will (would)’の生起が義務的であり、この‘will (would)’には「対話者の関心」(interlocutors’ interest) を示す機能があると述べる。

- (5) a. If you spoke to my father about that, we'd get in serious trouble.
b. ? If you would speak to my father about that, we'd get in serious trouble. (Fillmore 1990)
- (6) a. If you spoke to my father about that, I might get permission to go.
b. If you would speak to my father about that, I might get permission to go. (ibid.)

(5a)(6a)の if 節では、「あなたが父にそのことを話す」という仮定的事態が述べられているが、(5b)(6b)に示されるように、if 節内に‘would’が生起した場合、その容認性が異なる。これは、(6b)が発話者にとって望ましい事態を示すのに対して、(5b)は望ましくない事態であるため、参与者にとって望ましい事態を表す ‘would’は (5b)の if 節に意味的に適さないことによると Fillmore は論じている。多くの用例では、(5b)の if 節は発話者の関心を示すと同時に主語名詞句の意志を同時に示すため、その二つの用法は密接に関連しているものの、意志を示す主語名詞句を伴わないものや、‘be willing to’との置き換えが難しい用例があることから、対話者の関心という用法を独自に設けることが必要であると Dancygier & Sweetser (2005: 85) は述べる。

- (7) a. If this rain will just hold off, I can get the lawn mowed.
b. I want to marry her ... If she'll agree to it, that is. (Dancygier and Sweetser 2005: 85)

(7a)では、動作を行うにあたっての意志を示す動作主がなく、(7b)は “she is willing to agree to it”よりも、むしろ、“If I can get her to agree to it”のように「彼女が結婚することに同意する」という事態が実現することに対して積極的に発話者が関心を示すパラフレーズが望ましい例であり、必ずしも、意志用法と対話者の関心用法が重複するわけではないと Dancygier & Sweetser は説明している。このような意志、対話者の関心用法の場合、if 節主語としては2人称主語が用いられ、if 節では対話者の意志を確認する表現の頻度が高いことが報告されている。以下の(8)では、対話者に待つ意志があるかどうか、if 節で確認されている。

- (8) If you'll wait a minute, ma'am, ... she'll take her on the ice for you. (ibid: 87)

3. 考察において検討する要因

これまで、if+will 条件文の前件と if 節内の‘will’の機能を見てきたが、本稿では、if+will

条件文の前件に生じる主語と述語を手がかりとして、前件に示される事態の典型的特徴を特定し、if+will 条件文の前件において中心的な役割を果たす機能を検討する。後件については、予測/非予測の区別が if+will 節の機能と密接に関連していることが先行研究で論じられているが、予測/非予測以外の性質も if+will 節の機能に関与している可能性を検討するために後件の主語と述語の典型的性質についても考察を行う。

4. データと考察手法

1.1. データ

British National Corpus (BNC)から if+will 条件文に相当する用例を検索した上で、前件および後件の述語が明確ではない用例、また、if+will 条件文ではない用例をノイズとして除去した結果、236 例の if+will 条件文の用例を取得した。その後、以下の(9a-c)の項目に関してコロストラクション分析を用いて分析を行った。

- (9) a. 前件/後件述語語彙素
- b. 前件/後件主語: 一人称単数、一人称複数、二人称、三人称 (有生)、三人称 (無生)
- c. 後件に生起する助動詞

1.2. コロストラクション分析

本研究では、コロストラクション分析 (cf. Stefanowitsch 2013: 290-306) を用いて 4.1 節で類したデータについて分析を行った。今回の分析では、コロストラクション分析に含まれる Simple colostruational analysis と Covarying collexeme analysis を使用した。分析には、統計ソフトウェア R の colostruational analysis パッケージ (Flach 2021)を使用した。

1.2.1. Simple colostruational analysis

Simple colostruational analysis (SCA)は、調査対象の構文と構文内に生起する特定語彙の結びつきの強さを測定するために用いられる。分析には、調査対象の構文のコーパスでの生起頻度(a)、特定語彙の調査対象の構文内(b)とコーパス内での生起頻度(c)、および、その語彙の品詞のコーパス内での生起頻度(d)の情報が必要となる。それらの情報を基に、特定語彙の構文内での生起頻度が期待値よりも統計的に有意な値を示すか検討を行い、その結びつきの強さがコロストラクション強度として出力される。本研究では、if+will 条件文と前件/後件の述語の結びつきの強さを確認するために、この手法を使用した。(a)は if+will 条件文の BNC でのトークン頻度、(b)は if+will 条件文に生起する動詞/形容詞のトークン頻度、(c)は(b)に生起する各語彙項目の if+will 条件文におけるトークン頻度、(d)は BNC における動詞/形容詞のトークン頻度に対応する。

1.2.2. Covarying collexeme analysis

Covarying collexeme analysis (CCA)は、特定の構文内に生起する語彙項目のペアと構文の結びつきの強さの測定に用いられる。このように二つの語彙項目のペアが構文内で有意に強い結びつきを示す際には、フレーム、イメージスキーマの一貫性、プロトタイプが要因として機能することが多いと Stefanowitsch (2005: 299)は紹介している。本研究では、前件/後件主語と述語間の結びつきの強さを検討するために、本手法を使用した。

5. 結果と考察

1.3. If+will 条件文における前件の特徴

1.3.1. 前件述語

SCA の結果、if+will 条件文の前件に生起する 120 語のうち、71 語が有意なコロストラクションの強度を示すことが明らかとなった。そのうち、上位 20 語は次に示す通りである。語彙の後ろにある括弧内の値はコロストラクション強度を示す。

- (10) excuse (121.74), forgive (80.46), allow (64.23), let (52.32), put (42.24), give (33.02), quiet (31.23), help (26.89), pardon (22), permit (19.42), record (13.67), refer (12.86), disclaim (12.06), take (12.06), bear (11.61), wrest (11.46), babysit (11.4), meddle (11.24), repent (11.23), wait (10.74)

これらの if+will 条件文の前件に特徴的な語彙の多くは、次のような意味に分類可能である。(10)に示した強いコロストラクション強度を示す語彙のうち、複数が分類可能な意味カテゴリーを(11)に示す。

- (11) a. 許可: excuse, forgive, allow, let, pardon, permit
b. 援助・介入: give, help, babysit, meddle
c. 受容・忍耐: take, bear, wait

(11)の意味カテゴリーには含まれないものの、それらの意味カテゴリーと意味的に関連している語彙も認められる。「言及」の意味を示す‘refer’と、「沈黙」を示す‘quiet’は対照的な意味を示すという点で関連性が認められる。また、「放棄」の意味を示す‘disclaim’は「受容・忍耐」と対照的な意味を示すという点で、やはり、意味的な関連性が存在する。‘take’は非常に多義的な語彙であるため、「受容」の意味だけを示すわけではないが、if+will 条件文の用例を確認すると、次のように何らかの行為を引き受けることを示す例が多く見られる。

- (12) a. Father even allows quite unrelated youngsters to join the family group *if they will take on some of the work of baby-carrying.*

- b. It has no right to be there and *if you will **take** my advice* you will tell Frank Coven to take it out of that window and back to the bank as fast as he can.

上に挙げた上位 20 語は、if+will 条件文と強く結びつく語彙を表すが、SCA の結果は有意に結びつきが弱い反発関係 (repulsion)にある語彙も示す。反発関係にある語彙は、その語彙が生起する構文では、周辺の例である。if+will 条件文の前件述語では、‘be’は反発関係にある語彙であり、以下のような例は if+will 条件文の前件としては周辺例である。

- (13) *If you will **be** my voice*, I will speak for you for four years.

このことから、(13)のように主語対象の変化を示す‘will be’のような語彙は、if+will 条件文の前件では非常に周辺の例であることが伺われる。

前件述語に関する SCA の結果は、if+will 条件文の前件では、許可、援助・介入、受容・忍耐という三つの代表的な意味分類の存在を示す。また、受容・忍耐に対する放棄、言及に対して沈黙といった対照的な意味関連性を示す語彙も存在することが明らかとなった。

1.3.2. 前件述語と主語名詞

1.3.1 節では、SCA の結果を示し、前件に生起する述語と if+will 条件文の結びつきの強さを検討し、それらが複数の意味カテゴリーに分類可能であることを確認した。SCA の結果は if+will 条件文と単一の述語のコロストラクション強度を示すため、if+will 条件文の前件述語で示される事態に関わる参与者との結びつきについては明らかにしないが、CCA は if+will 条件文における 2 つのスロットに生じる語彙ペアと if+will 条件文のコロストラクション強度を示すことが可能である。

If+will 条件文の前件に生起する述語と主語名詞の CCA の結果は、前件で表される事態と主語名詞の組み合わせとして、強い結びつきが見られるものが存在することを示す。以下の主語名詞と動詞の 12 のペアが if+will 条件文では有意に高いコロストラクション強度を示しており、3 つのペアが有意に低いコロストラクション強度を示す。それぞれのペアの左側は主語の種類、右側は述語を表す。括弧内の数字はコロストラクション強度を示している。

- (14) 誘引関係 (attraction): SG_S/kill (10.14), INANIM/help (9.39), PL_S/produce (7.91), H/excuse (7.51), H/good (6.93), PL_S/allow (5.77), H/refer (5.18), H/wait (5.18), PL_S/listen (5.17), ANIM/come (4.29), ANIM/quiet (4.19), ANIM/read (4.19),
- (15) 反発関係 (repulsion): INANIM/excuse (4.8), ANIM/be (5.31), ANIM/help (6.22)¹,

¹ SG_S (1 人称単数), INANIM (無生 3 人称), PL_S (1 人称複数), H (2 人称), ANIM (有生 3 人称)

(14)には 1.3.1 節の SCA により if+will と強い結びつきが確認された前件述語 ('excuse', 'allow', 'refer', 'wait') が含まれる。これらの主語と動詞が if+will 条件文と強く結びつくことは、if+will 条件文の前件には、前件述語で示される事態が具体的な参与者と結びついていることを示す。その中で、'excuse' と 'allow' の許可動詞は if+will 条件文の前件では異なる主語との結びつきが強いという点で興味深い。

- (16) a. *If you will excuse me*, Beddington, I see my detective beckoning me.
b. God under takes to teach us through the Spirit *if we will allow him to lead us into a closer understanding of and obedience to Jesus Christ*.

(16)では、'excuse'の場合は対話者が、'allow'の場合には、発話者を含めた複数の参与者が表されるという点で異なる。また、'excuse'については(15)で見られるように、無生物主語との共起頻度は有意に低い。このことは if+will 条件文という環境下で'excuse'が無生物主語と共起するパターンは極めて稀な周辺例であることを示す。² また、有生主語が何らかの手助けを行うという事態は容易に想定が可能であるが、if+will 条件文の中ではこのような事態は非常に結びつきが弱いことが、(15)の反発関係として有生主語と'help'のペアが検出されていることから分かる。この環境下では下の例のように、'help'と無生物主語のパターンが典型的である。

- (17) I'll try to keep her here as long as I can *if it will help*.

If+will 条件文における前件主語と述語のペアに関する CCA の結果からは次のことが明らかとなった。SCA で if+will 条件文の前件述語として高いコロストラクション強度を示す語彙のうち、許可を示す 'allow'、'excuse'に関しては、それぞれ発話者を含めた複数の第一人称と対話者と強い結びつきを示すという点で、振る舞いを異にしている。また、'refer'、'wait'についても、対話者と強い結びつきが if+will 条件文の前件には存在していることが示された。このように if+will 条件文の前件で示される事態には特定の参与者が強く結びついているという状況が伺われる。

1.4. 後件の特徴

1.4.1. 後件述語

If+will 条件文の後件述語に関する SCA の結果によると、if+will 条件文に生起する 130 語の述語のうち、80 語が有意なコロストラクションの強度を示す。上位 20 語とコロストラクションの強度は次の通りである。

² if+will 節という環境において無生物主語と 'excuse' のパターンが周縁的なのか、'excuse' がそもそも無生物主語とは共起しにくい動詞であるのかという点については別途検討する必要がある。

- (18) grateful (64.18), return (29.02), often (22.99), possible (20.21), let (19.21), offer (19.02), worthwhile (15.65), obliged (15.25), wonder (13.44), live (13.39), stilted (13.22), assure (12.9), glad (11.9), still (11.4), pleased (11.4), see (10.97), fault (10.68), pernicious (10.6), disallow (10.45), undertake (10.14)

この結果からは if+will 条件文の後件に強く結びつく語彙として、形容詞が数多く見られるという点が伺われる。その中でも、‘grateful’, ‘glad’, ‘pleased’, ‘obliged’ など、主語名詞の感謝や喜びを示す語彙は特徴的である。次のような用例が確認される。

- (19) *I shall be **obliged** to you if you will be so good as to let the bearer have my copy of the last year 's Transactions.*

動詞にも ‘wonder’, ‘assure’, ‘see’ などの感情・心理を示す語彙が見られることから、if+will 条件文の後件は典型的に主語名詞の何らかの感情や心理的行為を示す特徴があること、また、他の形容詞が多く見られることから、if+will 条件文の後件には、感情・心理的状态や何らかの対象に対する評価を示す傾向があると考えられる。また、‘let’, ‘disallow’ などの許可・禁止に関わる語彙も後件では if+will 条件文との結びつきが強いことが確認された。

1.4.2. 後件述語と主語名詞

後件述語に関する CCA の結果は、650 パターンの主語と述語の組み合わせのうち、21 パターンが有意な誘引関係を示し、1 パターンが有意な反発関係であることを示す。

- (20) 誘引関係 (attraction): PL_S/pleased (9.46), ANIM/end (6.17), ANIM/send (6.17), ANIM/undertake (6.17), INANIM/worthwhile (6.17), SG_S/give (5.85), SG_S/grateful (5.71), INANIM/be (5.07), SG_S/examine (5.06), SG_S/glad (5.06), SG_S/join (5.06), SG_S/look (5.06), SG_S/obliged (5.06), PL_S/bring (4.69), PL_S/create (4.69), PL_S/deal (4.69), PL_S/do (4.69), PL_S/entertain (4.69), PL_S/hasten (4.69), H/see (4.31), PL_S/have (3.96)
- (21) 反発関係 (repulsion): INANIM/see (3.99)

前節では主語名詞の感情を示す述語が if+will 条件文の後件と強く結びつくことが明らかとなったが、CCA の結果は、そのような述語の多く (‘pleased’, ‘grateful’, ‘glad’, ‘obliged’) が if+will 条件文の後件では、発話者の感情を表すことを示している。

- (22) a. ***We shall be pleased** if you will give further consideration to the question of the release.*

- b. *I would be grateful* if they will contact me.
- c. At all events, *I shall be much obliged to you* if you will write to me as soon as possible...

また、有意に if+will 条件文と結びつきが強いと認定された 21 パターンのうち 14 パターンで、発話者が含まれているという点で if+will 条件文の後件では典型的な参与者として、発話者を含むことが伺われる。

このように、後件で発話者の感情が示されるという事態が、if+will 条件文の後件と強く結びついている事実は、if+will 条件文の前件が参与者の肯定的な関心を示すという機能に関連性があると考えられる。Dancygier (1998: 117)は if+will 節が、参与者の肯定的な関心を示すのは、後件に示される望ましい事態の原因となるためであると主張している。

- (23) If the sun'll shine, we'll be able to have our picnic. (ibid.)

Dancygier は(23)の前件が発話者の肯定的な関心を示すのは、後件の「ピクニックに行くことができる」という望ましい事態から、その原因にあたる前件の「太陽が輝く」を望ましいと捉えることが可能であることによると説明する。(22a-c)の前件は、発話者の肯定的な関心を示すと解釈されるが。これは後件に発話者の感情が表され、前件に、その感情の原因となる事態が表されていることが関係する。(22b)の後件では、発話者は感謝するという予測を表すが、これはその前件で仮定されている「彼らが私に連絡をとる」という事態の仮定を、肯定的に捉えていることによる。望ましくない事態に感謝することは、通常、考えられない。if+will 条件文の後件に発話者の肯定的感情が示される事態が密接に結びつくことが、if+will 条件文の前件に発話者の肯定的な関心に関連付ける役割を示していると考えられる。

6. まとめ

本稿では、if+will 条件文の前件/後件の主語、および述語として強い結びつきを示す言語表現を、コロストラクション分析により考察した。その結果、if+will 条件文の前件では、許可、援助・介入、受容・忍耐・放棄、言及・沈黙の意味カテゴリーを示す述語が密接に関連していることが明らかとなった。そのカテゴリーのうち、許可、言及、受容を示す語彙の一部については、特定の主語との関連性が認められた。この結果は、if+will 条件文の前件について、特定の参与者が事態と密接に結びついた具体的なパターンと、特定の参与者とは強い結びつきを持たない抽象的なパターンがあることを示唆する。

後件については、多くの形容詞が後件と密接に結びついていること、また、それらの語彙は感謝や喜びなど肯定的な内容を示すものが多く、その主語として発話者が密接に結びついていることが明らかとなった。また、そのように発話者の肯定的な感情が後件で示されるという用例が典型例として機能することで、if+will 条件文の前件が、対話内での参与者にとって肯定的な内容を示すという意味をもたらすということを提案した。

残されている課題として、前件に後方転移が生じた現在形述語ではなく、‘will’が生じるという点について、要因を考察する必要があること、また、後方転移が生じた現在形述語を持つ条件文と if+will 条件文に見られる違いについての考察という点が挙げられる。

参考文献

- Brinton, Laurel J. (2008) *The Comment Clause in English*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Comrie, Bernard (1982) Future Time Reference in the Conditional Protasis. *Australian Journal of Linguistics* 2: 143-152.
- Comrie, Bernard (1986) Conditionals: A Typology. In E. C. Traugott, A. ter Meulen, J. Snitzer Reilly, and C. A. Ferguson (eds.) *On Conditionals*, 77-99, New York: Holt, Rinehart and Winston.
- Dancygier, Barbara (1998) *Conditionals and Prediction: Time, Knowledge and Causation in Conditional constructions*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Dancygier, Barbara and Eve Sweetser (2005) *Mental Spaces in Grammar: Conditional constructions*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Fillmore, Charles (1990) The Contribution of Linguistics to Language Understanding. In Aura Bocaz (eds.) *Proceedings of the First Symposium on Cognition, Language, and Culture*, 109-128, Universidad de Chile.
- Gries, Stefan Th. and Anatol Stefanowitsch (2004) Extending Collostructional Analysis: A Corpus-based Perspective on ‘Alternations’. *International Journal of Corpus Linguistics*, 9/1: 97-129.
- Haegeman, L. (1984) Pragmatic Conditionals in English. *Folia Linguistica*, 18 (3-4): 485-502.
- 吉良文孝 (2018) 『ことばを彩る 1: テンス・アスペクト』東京: 研究社.
- Leech, Geoffrey. (2011) *Meaning and the English Verb Third Edition*. Tokyo: Hituzi Syobo.
- Stefanowitsch, Anatol (2013) Collostructional Analysis. In Thomas Hoffman and Graeme Trousdale (eds.) *The Oxford Handbook of Construction Grammar*, 290-306, Oxford: Oxford University Press.
- Stefanowitsch, Anatol and Stefan Th. Gries (2003) Collostructions: Investigating the Interaction of Words and Constructions. *International Journal of Corpus Linguistics*, 8/2: 209-43.

使用コーパス・ソフトウェア

- Flach, Susanne (2021) *An R Implementation for the Family of Collostructional Methods (Version 0.2.0)*.
- The British National Corpus, Version 3 (BNC XML Edition) (2007). Distributed by Bodleian Libraries, University of Oxford, on behalf of the BNC Consortium. URL: <http://www.natcorp.ox.ac.uk/>
- R Core Team (2019). *R: A Language and Environment for Statistical computing*. R Foundation for Statistical Computing, Vienna, Austria. URL: <https://www.R-project.org/>.

単義説・多義説・多使用論の建設的検討：英語前置詞 *at* を例にして

田尾 俊輔

1. はじめに

例文(1)にあるように、英語前置詞 *at* には様々な意味がある。¹安藤 (2012) によると、(1a) は場所の一点、(1b) は時間の一点、(1c) は価格・速度・割合など上下移動するものに関する目盛りの一点、(1d) はある動作の目標としての一点、(1e) は場所 (= (1a)) の比喩的用法としての状態、(1f) は感情の生じる事実との接点を表す。

- (1) a. They live at 10 Victoria Street.

彼らはビクトリア通り 10 番地に住んでいる。

- b. She will have arrived in France at the end of June.

彼女は 6 月の末にはフランスに到着しているだろう。

- c. I bought these books at a dollar each.

これらの本をそれぞれ 1 ドルで買った。

- d. She pointed at the placard with her finger.

彼女はプラカードを指さした。

- e. She felt completely at ease with Dick.

彼女はディックに対してはすっかり気持ちが楽だった。

- f. I was surprised at the news.

私はその知らせを聞いてびっくりした。

(安藤 2012: 12-15)

理論的立場の別を問わず、(1)に示した *at* の事例も含め、前置詞に関しては今までに多くの研究が蓄積されてきている。人間の認知と言語能力の関係を探る認知言語学の立場からの研究を取り上げると、Lakoff(1987) による放射状カテゴリーを用いた *over* の分析、²田中らによるコア理論を利用した前置詞全般の分析(田中・松本 1997、田中・佐藤・阿部 2006)、Tyler and Evans (2003) による基本義と独立義を厳格に定める分析、平沢 (2019) による多義ではなく多使用という観点からの *by* の分析などがある。特に平沢による多使用論の考え方は、これまでの意味研究や前置詞研究の流れとは大きく異なる部分があり、従来の意味理論を整理・再考しつつ、その多使用論を他の前置詞あるいは前置詞以外の語句で検討していくことは、後続研究の指針を提供し得るという点で有用であると思われる。

そこで本稿は、(1)をはじめとする前置詞 *at* の意味的諸相の観察を通じて、単義説・多義説・多使用論を再検討することを目的とする。2 節で各意味理論を概観し、3 節で *at* の例文を観察した後にそれぞれの理論へとフィードバックを行なう。4 節は本稿のまとめである。

¹ 本稿では、特に断りのない限り、提示した例文中の下線や強調、イタリックは筆者によるものである。

² 英語前置詞 *over* の一連の研究に関しては、田中・松本 (1997) にまとめられている。

2. 意味にまつわる諸理論の概観

本節では、代表的な意味理論の枠組みを取り上げる。具体的には、単義説 (=2.1.) と多義説 (=2.2.)、そして多使用論 (=2.3.) である。

2.1. 単義説 (Monosemy)

「単義」とは文字通り「一つの意味」のことを指し、ある語における抽象度の高い意味を想定した後に、そこからその語が有するすべての意味を文脈の影響を受けた異形として引き出せると考える方法である (Ruhl 1989, Tyler and Evans 2003: 37)。例えば、加藤他 (2015) は前置詞 *at* の意味について単義説の考えを適用し、(2)のように *at* の語彙的意味を定める。

- (2) [_{PP} *at* NP] (筆者注: PP は前置詞句(Prepositional Phrase)) において、*at* は、「ある環境において指定されるべきものが NP (筆者注: NP は名詞句(Noun Phrase))である」という意味を持ち、かつそれ以上の語彙的意味を持たない。

at の意味: 〈特定〉 (加藤他 2015: 129)

彼らの分析によると、次の(3a-c)は事実上同じ事象を記述しているが、(3a)の形式 (= *on*) は表面をもつものを、(3b)の形式 (= *in*) は中と外を区別できる形を要求する。その一方で、(3c)の形式 (= *at*) は後続する *the beach* の形状について何も指定しておらず、場所が何であるかを〈特定〉する役割のみを果たしているとする。

- (3) a. There are so many young people on *the beach*.
ビーチ (の表面上) には多くの若者がいた。
- b. There are so many young people in *the beach*.
ビーチ (という空間の中) には多くの若者がいた。
- c. There are so many young people at *the beach*.
ビーチ (という場所) には多くの若者がいた。 (加藤他 2015: 129、訳文は筆者)

また、*she* と *the roof* の関係性が示される(4)のように、前置詞は「何か」と「前置詞の目的語」との位置関係を表示するものであり(加藤他 2015: 130、Langacker 2008: 99)、この機能をもとに(3c)を考えると、前置詞 *at* は「何か」と「*at* の目的語」との位置関係しか表示せず、その「何か」の位置が「*at* の目的語」で表されているということになる (加藤他 2015: 130)。

- (4) *She is sitting on the roof.*
彼女は屋根 (の上) に座っている。 (Langacker 2008: 99、訳文は筆者)

加藤他 (2015) は上記のように *at* の意味を捉えることにより、(5)では得意なことが英語だ

と〈特定〉されており、また(6a)では蹴るものがドアと〈特定〉され、加えて(6b)の棲み分けによって差異化が働き、³蹴ったがドアが開かないということも説明できるとしている。

(5) Mary is very good at English. (安藤 2012: 12)

(6) a. He kicked at the door, but it didn't open.

b. He kicked (*at) the door open. (加藤他 2015: 133)

(5)や(6)が *at* の意味の違いに帰着すると考えると、(7a, b)のような解釈の可能性を否定できなくなってしまうという問題が生じるが、(2)のように *at* の意味を〈特定〉と絞り、残りは文脈判断とすることにより、そのような不自然さを解消することができると述べている。

(7) I am at Tokyo.

a. *私は東京が得意である。 (加藤他 2015: 131、cf. (5))

b. *私は東京に存在したが、存在しなかった。 (訳文は筆者、cf. (6a))

c. 私は東京にいる。 (訳文は筆者)

更に、(1f)に見られる感情を表す表現についても、上記と同様の理由で、感情の要因が何であるのかを〈特定〉していると考えの方が妥当であると指摘している。

2.2. 多義説 (Polysemy)

「単義」とは対照的に、「多義」とは語は2つ以上の意味を有しており、それらの意味が互いに体系的に結びついていると考える方法である (Lakoff 1987: 316)。⁴意味の結びつき方の仮説としては、代表的なものに放射状カテゴリーやネットワークモデルがある (=2.2.1.)。また、単義説と多義説の間に位置づけることができるコア理論 (=2.2.2.) や多義の広がり方に厳格な制限を設ける試みとしての Principled Polysemy (=2.2.3.) も併せて確認する。

2.2.1. 放射状カテゴリー (Radial Category) とネットワークモデル (Network Model)

放射状カテゴリーは中心事例と一般的なルールでは予測できない慣習化した周辺事例を放射状に並べたものであり、周辺事例は中心事例の異形として見なされる (Lakoff 1987: 84, 91)。Lakoff(1987) は前置詞 *over* の放射状カテゴリーを提示しており、以下の(8)に示す6つの意味があるとする。⁵(8a)が中心事例であり、(8b-f)は周辺事例である。

³ 語彙的意味の差異が見られないものの、表現として成立する場合には「棲み分け」が為されると考える。

⁴ 多義の種類としては、例えば、*school* が「子どもの教育 (the education of children)」や「大学の経営体 (the administrative structure of a university)」を指すといったように1つの語が複数の領域 (domain) を喚起し得る場合や、*high* が「垂直空間におけるモノの位置 (e.g. high ceiling)」や「モノの高さの程度 (e.g. high building)」を指すといったように1つの語が同じ領域内の別々の要素を喚起する場合がある (Taylor 2003: 103)。

⁵ 前置詞 *over* の放射状カテゴリーの詳細な図及びその議論については、Lakoff (1987: 416-461) を参照されたい。紙面の都合上、本稿では図を省略する。

- (8) a. The Above-Across Sense e.g. The plane flew over the hill.
 b. The Above Sense e.g. Hang the painting over the fireplace.
 c. The Covering Sense e.g. The board is over the hole.
 d. The Reflexive Sense e.g. Roll the log over.
 e. The Excess Sense e.g. She overslept.
 f. The Repetitive Sense e.g. Do it over. (Lakoff 1987、田中・松本 1997: 67)

意味を体系的に描く方法にはネットワークモデルもある。Langacker (2008: 37) によると、語の意味のうち、より中心的意味であるプロトタイプ (prototype) が存在する。ある意味から別の意味に拡張 (extension) する時、両者の共通性をスキーマ (schema) として取り出し、元々の意味はスキーマの具体化 (instantiation) となる。このように各意味やスキーマを拡張や具体化の関係で結んでネットワークを成す。例えば、図 1 は *ring* のネットワークの一部であり、枠の太さはプロトタイプ度の高さ、実線矢印は具体化、破線矢印は拡張を表す。

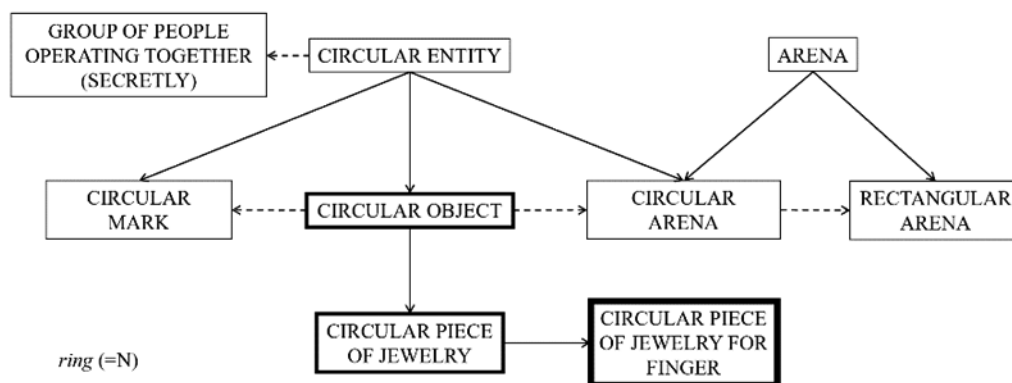


図 1 : *ring* の意味ネットワークの一部 (ibid.)

放射状カテゴリーにせよネットワークモデルにせよ、中心事例から周辺事例に拡張することで体系だった繋がりが構築されるというのがポイントである。ここで前置詞 *at* の事例を取り上げてみると、「地点」という空間的意味 (= (1a)) から時間的意味 (= (1b)) に拡がり、更に「点」がその他の様々な用法に繋がることが指摘されている (木内 2014)。

ただし留意しておく必要があるのは、中心的な事例・プロトタイプから周辺の事例に拡張する時に何らかの制限がなければ自由に意味拡張してしまう恐れがあるということである。また、中心義の認定基準がそこまで厳格でなく、各々の研究者に判断が委ねられる部分があり、それ故に恣意的になってしまう可能性があるというのも大きな問題点として挙げられる。この問題は、2.2.3 節で再度取り上げることになる。

2.2.2. コア理論 (Core Theory)

コア理論とは、語には文脈に依存しない一般化された知識であるコア (context-free

meaning) が存在しており、そのコアが文脈 (context) の影響を受けることによって、文脈に依存した各々の語義 (context-sensitive senses) になるという理論であり、これらの関係を図式化したものが図 2 である (田中(編)1987:32、田中・佐藤・阿部 2006:7)。また、後者の語義のうち、よく使われる意味はプロトタイプとして認められる。

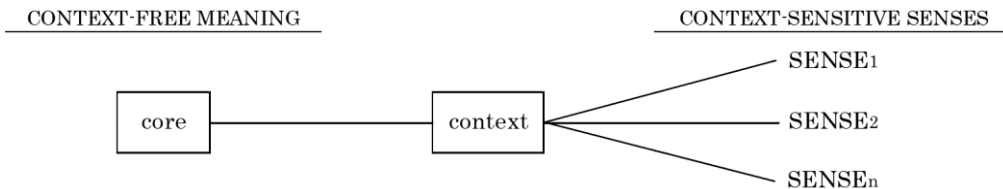


図 2 : コア理論 (田中(編)1987:32 をもとに筆者作成)

そして、コアは図式として表され、その図式を様々な場面に当てはめる、図式の一部を切り出すといった認知操作を加えることになる (田中・松本 1997、田中・佐藤・阿部 2006)。⁶例えば、*at* のコアは「〈…のところに (で)〉の意で場所を表す」とされており、(9a)のように漠然とした場所を指す場合もあれば、(9b)のように焦点がより絞られることでの指す場合もある。また、(9c)のような状態にあるということを表すこともできる (田中・佐藤・阿部 2006:48)。

- (9) a. the first kiss at the lake 湖 (のところに) でのファーストキス
 b. hit at the ball ボール (という的) を狙って当てる
 c. at a loss 途方に暮れた／損をした (状態のところで) (*ibid.*: 48-49、訳文は筆者)

コア理論には、コアという抽象的な意味を抽出し、文脈を利用するという点で単義説 (= 2.1.) 的側面と、文脈に依存した語義にはプロトタイプが存在するという点で多義説 (= 2.2.) 的側面が共存するが、それ故に双方の欠点を引き継いでしまうことにもなるといえよう。

2.2.3. Principled Polysemy

2.2.1 節で意味が際限なく広がってしまう可能性を指摘した。この問題の一解決策として、Tyler and Evans (2003: 47) は基本義 (primary sense) の認定基準 (= (10a-e)) を提示し、この基準を多く満たすものを基本義と見なす。そして、共起や文脈による推論が定着して意識化されなくなると、基本義とは別の独立義 (distinct senses) が生じるとする (*ibid.*: 58-61)。⁷

⁶ 認知操作には「図式投射」や「図式焦点化」、「差異化」、「図式融合」、「図式の回転」などが提示されている。図式の事例も含めて、詳しい内容は田中・佐藤・阿部 (2006) を参照されたい。

⁷ 逆に言えば、推論で導かれるような意味は独立義としては認められないということになる。独立義の決定方法については Tyler and Evans (2003: 42-45) や平沢 (2019: 8-9) も参照されたい。

- (10) a. **earliest attested meaning**
歴史的に最も早くから使われている
- b. **predominance in the semantic network**
意味ネットワーク上で最も目立っている
- c. **use in composite forms**
overcoat や *look over* のように混成の形で使われる
- d. **relations to other spatial particles**
対になる語が存在する
- e. **grammatical predictions**
意味拡張において検証可能な予測をもたらす (*ibid.*: 47、日本語の補足は筆者)

そして前置詞 *at* については、時を表す表現 (= (1b)) にはもはや常に TIME IS SPACE メタファーが喚起されているとは考えにくく、独立義の **Temporal Sense** が認められている。

しかし、(10a-e)は評価上各項目が等しい価値を有しているのか、単純に当てはまる項目数だけで判断が可能かといった点で、疑問が残る指標ではある。また、文脈の推論が定着している度合いを判断する方法によって独立義になるか否かが変動することもあり得る。

2.3. 多使用論 (Usage Variation)

単義説にせよ多義説にせよ、メタ的に意味を捉える際にはそれぞれに特有の問題が浮上する。そこで多使用論では、そのようなメタ的分析よりも具体的な使用方法、即ちある語彙項目を他の語彙項目と共起させることによってどのような状況を描写できるのかという知識こそが、その語彙項目の意味を知っていることであると考えられる (平沢 2019: 40)。^{8, 9}平沢 (2019) では前置詞 *by* にまつわる多使用論が展開されており、*by* の具体的な例文の観察を通して、例えば時間義 *by* [TIME] を使用するための知識として(11)を提示している。

- (11) a. *by* [TIME] の具体的特徴 1: 時間軸を「目で追う」こと
の目的
[TIME] よりも前から始まった変化の結果状態を語る人が多いが、[TIME] よりも前に見られた状態が [TIME] においても依然として成り立っていることを語る場合もある。
- b. *by* [TIME] の具体的特徴 2: 修飾する動詞句の状態性
by [TIME] が修飾する動詞句は、原則として状態性動詞句¹⁰を取る。[TIME] が未来

⁸ この主張はメンタルコーパス (Taylor 2012) の考え方が反映されている。Bybee (2010) では具体的な言語事例の記憶が類推的拡張や新たな構文を作るきっかけになるという指摘もある。これらには「使用基盤 (usage-based)」の考え方が徹底されている。

⁹ ただし、平沢 (2019) の関心は「話者の言語使用を可能にする知識とは何か」というところに置かれていることに留意しておきたい。

¹⁰ 「状態性動詞句」とは基準時における「状態」の存在を述べる形をとる動詞句とされている。「進行形」或いは「完了形」をとる「完結的動詞句」や、「完了形」或いは「単純形」をとる「非完結的動詞句」がこ

である場合には、非状態性動詞句も認められるが、その場合でも [TIME] においてその動作の結果状態が成立していることが文意の焦点となる。

(平沢 2019: 61)

(11)に見られる記述は確かに使用方法を描写したものであるといえるが、より具体的な文の形に触れた上でこの記述を見出ししているのだとすれば、ネットワークモデル (=2.2.1.) におけるスキーマやコア理論 (= 2.2.2.) におけるコアとの差異がわかりづらくなる。¹¹また、前置詞 *by* は中心的な意味がわかりにくいと述べている一方で (平沢 2019: 11)、前置詞 *at* の「点」や「特定」のようにある程度全体を包括できるような意味やイメージを取り出せる場合には、それらが言語使用の際にどう作用し得るのかを改めて考える必要があるといえる。

3. 英語前置詞 *at* の意味と単義説・多義説・多使用論

本節では、前置詞 *at* を含む代表的な例文を観察した後、各意味理論との関係を議論する。

まず、空間でのとある場所を指す *at* としては例文(12)がある。例えば、「点」が抽象的な意味として抽出される、或いはネットワークにおける中心的な意味だと仮定すると、(12a)は地図上の番地を「点」と解釈し、(12b)は建物としての駅を俯瞰して見た時に「点」と見なし、(12c)はパーティーという場に含まれる様々な要素を集約して一つの「点」と捉え、¹²(12d)は本の 10 頁目を、(12e)は声の変化の一部を場所における「点」だと考えることができる。¹³

(12) a. They live at 10 Victoria Street. (= (1a))

彼らはビクトリア通り 10 番地に住んでいる。

b. I arrived at the station just in time.

私はちょうど間に合って駅に着いた。

c. We met at a party.

私たちはパーティーで会った。

d. Let us begin at page ten.

10 ページから始めましょう。

e. He shouted at the top of his voice.

彼は声を限りにどなった。

(安藤 2012: 12-13)

れに当てはまる (平沢 2019: 65-66)。

¹¹ 平沢 (2019) は「意味」と「使用」の関係性を明確にしきれておらず、それ故に、(11)のような使用に関する記述がネットワークモデルでのスキーマ的記述と何が異なるのかが不明瞭になっているともいえる。

¹² 例文(12c)は「私たちはパーティーの時に会った」とも訳せるため、時間的要素が含まれるとも考えることも可能である。類似事例としては、I hope to see you at the graduation. 「卒業式の時にお会いしたいものです」(WEJD) がある。このように考えると、前置詞 *at* の時間的意味には TIME IS SPACE メタファーが働いている一方で、時空間において空間を指すことでそこに隣接する時間を指すというメトニミーが働いているともいえる。また、場所の比喩的用法 (= (1e)) との関連性を見出すこともできる。これらのことも含めて、「パーティーという場に含まれる様々な要素」と本文中では記述している。

¹³ (12d)や(12e)は場所でないものを場所として捉えているといえる。

次に、時を表す *at* (= (1b)) に関して、注目すべき表現に(13a)がある。*at night* から夜を「点」として見ていることが読み取られるが、それだけではなく、*in the night* (= (13b)) と比べた時の *the* の有無から、(13a)は「特定の夜」でなく「一般的な夜」を指すことがわかる。

(13) a. John always works late at night.

ジョンはいつも夜遅くまで勉強する。

b. The fire broke out in the night.

火事は夜中に起こった。

(安藤 2012: 13)

この他に、動詞に前置詞句が後続する動能構文 (Conative Construction) (= (6a)、(14)-(15)) と形容詞に前置詞句が後続する文 (= (16)) を取り上げておく。一般的に、(前置詞が動詞に後続しない) 他動詞構文は動詞の表す行為が完了したことを含意するため、行為の完了を打ち消す表現を続けることが不適となる一方で、動能構文は必ずしも行為が完了していることを要求せず、行為の完了を打ち消す表現を伴うことが可能である。従って、後続文にて行為の完了を打ち消す(14b)では、動能構文の形のみが適切となる。しかしながら、(15)のように、動作の完了 (accomplishment) の有無というよりもその活動 (activity) 自体に焦点を当てる動詞の場合は上述の差異が無くなり、その活動を打ち消すことはできない (岡本他 1998)。また、動能構文には多くの場合「繰り返し」の意味も付与される (久野・高見 2017)。

(14) a. John shot { \emptyset / at} the elephant.¹⁴

ジョンは象を撃った。

b. John shot { $\ast\emptyset$ / at} the elephant, but he missed it.

ジョンは象を撃ったが、外した。

(岡本他 1998: 1-2、訳文は筆者)

(15) a. John beat { \emptyset / at} his dog with the stick.

ジョンは杖で犬を打った。

b. * John beat { \emptyset / at} his dog with the stick, but he missed it.

ジョンは杖で犬を打ったが、外した。

(岡本他 1998: 1-2、訳文は筆者)

また、形容詞、特に感情形容詞に後続する *at* 句はその感情が生じた瞬間を指すとされる (Osmond 1997: 117)。例文(16)中にある「驚き (*astonished*)」は瞬間的に起こる感情とされ、比較的長期の感情を指す時に共起する傾向にある前置詞 *with* とは相性が悪いと判断される。

(16) a. I was astonished at the new T.V. programmes.

b. * I was astonished with the new T.V. programmes.

¹⁴ 例文(14)-(15)中の記号 \emptyset はその箇所にも何の語句も入っていない空の状態であることを示す。

私はその新しいテレビ番組に驚いた。

(*ibid.*、訳文は筆者)

ここまで前置詞 *at* の例文を概観してきたが、これらを各理論でどう扱うかを考えてみる。

単義説のように「特定」(加藤他 2015)という抽象的意味を仮に取り出しても、*at night* (= (13)) や *astonished at NP*¹⁵ (= (16)) における *at* の意味は文脈からどのように導かれるのかを説明しづらく、たとえ説明できたとしてもこじつけになってしまう可能性は否めない。「点」では動能構文 (= (14)-(15)) の「繰り返し」の意を説明しにくい。このように単義説の不利な点としては、そもそもある語に含まれる個別の意味から抽象的な単義を綺麗に抽出することができるのか、文脈はどの程度まで作用し得るものなのかということが挙げられる。

次に、多義説の考え方では、*TIME IS SPACE* メタファーや「場」からその場が生じた「時間」を指すというメトニミー的拡張によって(16)等の事例は説明が試みられるかもしれないが、そこには様々な要因が絡んでいる可能性が想定されるため、ネットワークの一意的な決定は困難である。¹⁶また、(16b)の *with* は(16a)の *at* と棲み分けを行なっていると考えられるが、その棲み分けはネットワーク上の情報として明示化されているわけではない。

それでは多使用論で問題が解決されるのかと問われると、定着した表現を話者が使用する際にはメタ的な意味を意識しないとしても(平沢 2019: 13)、(*by* も含め) *at* の使い方を記憶する過程においてカテゴリー化というメタ的操作をしている可能性を否定する証拠にはならない。そして、多使用論が適用されるためには表現がどの程度記憶される必要があるのかという判断は難しい。¹⁷例えば、母語話者でない場合、抽象度に多少の程度差はあるだろうが、話す場面でメタの意味を想定することはあり得る。特に *at* の使用時に「点」を想起すれば、上述した例外はあるものの、多くの場合に対応可能だと思われる。¹⁸それにより *at* の使用が促進され、更なる記憶に繋がることもあるだろう。

最後に、2 節から 3 節までに議論してきたことを表 1 にまとめておく。

表 1：単義説・多義説・多使用論の比較

	単義説	多義説	多使用論
特徴	抽象的な意味を抽出し、その意味に文脈の影響が加わる。	語に含まれる複数の意味どうしが体系的に結びつく。	具体的な使用の知識が発話での言語使用を可能にする。
欠点	抽象的な意味の取り出し方や文脈の影響度の判断方法が統一されていない。	基本義・プロトタイプの決定方法が統一されていない。ネットワークは一意的でない。	意味と使用の定義及び関係が不明瞭。記憶と言語使用の関係性がわかりにくい。

¹⁵ NP は名詞句 (Noun Phrase) を指す。

¹⁶ 改めて注 12 を参照されたい。

¹⁷ この点は、多義説における中心義設定の問題と類似している部分がある。2.2.1 節と 2.2.3 節を再度確認されたい。

¹⁸ 平沢 (2019) に限らず、「記憶」と「言語使用」の関係を十分に扱った論考はあまりないように思える。

4. まとめと展望

本稿では前置詞 at の例文及び意味間の関係性を参考にしながら、意味理論のうち、単義説と多義説、多使用論を検討した。その中で、各理論に特徴と改善点があり、特に多使用論では「記憶」・「意味」・「使用」の関係性を明瞭にしていく必要があることを示唆した。

参考文献

- 安藤貞雄 (2012) 『英語の前置詞』 東京: 開拓社.
- Bybee, Joan (2010) *Language, Usage and Cognition*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 平沢慎也 (2019) 『前置詞 by の意味を知っているとは何を知っていることなのか: 一多義論から多使用論へ』 東京: くろしお出版.
- 加藤鉦三・花崎一夫・花崎美紀 (2015) 「At の意味論」『英文学研究支部統合号』 7: 127-135.
- 木内修 (2014) 「at の意味論的考察」『東洋大学大学院紀要』 51: 207-226.
- 久野暉・高見健一 (2017) 『謎解きの英文法: 動詞』 東京: くろしお出版.
- Lakoff, George (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Langacker, Ronald W. (2008) *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford: Oxford University Press.
- 岡本順治・佐々木勲人・中本武志・橋本修・鷲尾龍一 (1998) 「打撃・接触動詞の動能交替と結果の含意」筑波大学特別プロジェクト研究報告書『東西言語文化の類型論』: 173-192.
- Osmond, Meredith (1997) The Prepositions We Use in the Construal of Emotion: Why Do We Say *Fed Up With* but *Sick And Tired Of*? In Niemeier, Susanne and René Dirven (eds.) *The Language of Emotions: Conceptualization, Expression, and Theoretical Foundation*, 111-133, Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Ruhl, Charles (1989) *On Monosemy: A Study in Linguistic Semantics*. Albany: State University of New York Press.
- 田中茂範(編) (1987) 『基本動詞の意味論: コアとプロトタイプ』 東京: 三友社.
- 田中茂範・松本曜 (1997) 『空間と移動の表現』(日英語比較選書 6) 東京: 研究社.
- 田中茂範・佐藤芳明・阿部一 (2006) 『英語感覚が身につく実践的指導: コアとチャンクの活用法』 東京: 大修館書店.
- Taylor, John R. (2003) *Linguistic Categorization: Third Edition*. Oxford: Oxford University Press.
- Taylor, John R. (2012) *The Mental Corpus: How Language Is Represented in the Mind*. Oxford: Oxford University Press.
- Tyler, Andrea and Vyvyan Evans (2003) *The Semantics of English Prepositions: Spatial Scenes, Embodied Meaning and Cognition*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 辞書
- 井上永幸・赤野一郎(編) (2003) 『ウィズダム英和辞典: 第3版』 東京: 三省堂. (WEJD)

XYZ construction 再考: X is the Y of Z とその関連表現のネットワーク化

早瀬 尚子

1. はじめに

XYZ 構文とは、Turner (1991)、Fauconnier and Turner (2002)、Sullivan (2009, 2013)などで言及されているもので、X is Y of Z という形式を取り、比喩的な意味を表す表現である。

- (1) a. The Rockies are the Alps of North America.
- b. ...inflation is a remedy for unemployment.

ただし、同じ形式でも常にこの解釈が得られるとは限らない。たとえば(2)はこれとは異なる。その理由は、(2)は(3b)のように書き換えても意味が変わらないが、本稿で扱う XYZ 構文は形式を変えてしまうと同一意味が得られなくなるためである。

- (2) Hillary was Bill Clinton's First Lady. / Paris is the capital of France.

(Turner (1991), Sullivan (2009, 2013))

- (3) a.# The Alps of North America is the Rockies
- b. Bill Clinton's First Lady is Hillary. / The capital of France is Paris.

(2)の文は A is B=B is A と書き換えが可能であり、A という存在と B という存在の同一指示性を述べる指定文 (Specificational Sentences) と分類される。一方、本稿が扱う(1)の文では A is B は B is A に書き換えられない。Rockies と Alps とは無関係の別物でありロッキーとの類推で初めて Alps が North America と結びつけられる措定文 (Predicational Copula Construction) だと言える。また、この形式でなければこの意味を得られないという点では、典型的な「構文」としての特徴を備えていると言えるだろう。

本論はこの(1)に挙げた XYZ 構文がどのように認定されるかについて、実例を検討したのち、構文文法的な立場からその特徴について理論的な考察を行う。そしてこれらが様々な下位構文から成り立つと同時に、比較的抽象度の高めの上位構文から動機づけをもらいつつ拡張していると考えられることを見る。

2. 先行研究

まず XYZ 構文の特徴について述べておく。文献におけるプロトタイプ的な事例は以下のように一等親の親族名称、特に mother を使うものである。

- (4) a. Necessity is the mother of invention.
- b. Death is the Mother of Beauty

c. Repression is the mother of stupidity.

この親族語 (kinship terms) である mother の指示対象が決定されるためには「(誰かの) 母親」という他の要素による具体化が必要となる。またここでの mother は字義通りの「母親」ではなく「始まり・源」という比喩的意味で用いられているという特徴をもつ。Sullivan (2009) は、Croft (2003a) の主張に基づき、自律的 (Autonomous) 要素がメタファー表現の目標領域つまりは字句通りに解釈されるべき内容を表し、一方で依存的 (Dependent) 要素が起点領域つまりはメタファー的に解釈されるべき内容を示している傾向が見られることを、コーパスデータの検討を通じて示した。(4)の事例に即して説明すると、mother of beauty の mother はその指示対象特定のために「誰の」mother かという情報が必要な、関係的 (relational) かつ依存的な要素であると考えられる。また通常の X is Y という形式においても、is Y という要素は、それが叙述する対象 X を必要としていることから、依存的であるが、You are my sunshine という表現における依存的要素 be my sunshine が比喩的に用いられているように、依存的要素がメタファー的に解釈される傾向が指摘されている。これら二つが複合的に合わさっているのが、X is Y of Z という形式である。当該形式において、X と Z はそれぞれ自律的な存在であり、かつ目標領域において解釈される字義通りの存在であるのに対し、依存的要素である Y はメタファー的に解釈されるということになる。

ただしこの形式には、親族名称だけでなくそれを超える様々な名詞が用いられて、幅広く使用されるようになっていることも事実である。たとえば次のような例がこれにあたる。

- (5) a. Tuna is the oil of the Western and Central Pacific. (Slate Magazine)
b. They (=Palau) became the Saudi Arabia of sashimi. (Slate Magazine)

パラオ共和国ではマグロ漁が盛んでそれを国の大きな資源としていることから、「マグロは西太平洋・中部太平洋の石油である」と言い、また「パラオはサシミの世界のサウジアラビアになった」と述べている。ここでどのような要素がこの Y の部分に生起できるのか、もう少し詳細にその性質を検討してみたい。

3. 固有名詞が来る場合

Y の要素には kinship relation が用いられると Turner (2002) は述べているが、データをよく検討してみると、Y にはそれだけには限られず、固有名詞が多く用いられている。

- (6) a. Burton played 136 performances of Hamlet over 18 weeks. The production grossed \$1,250,000 and Elizabeth hailed him as **the Frank Sinatra of Shakespeare**.
b. “**Eric Raymond is the Margaret Mead of the Open Source movement**”
c. **Was Margaret Thatcher "the Ronald Reagan of England"?**

いずれの例においても固有名詞が使われている。(6a)では「シェークスピア界のフランク・シナトラ」つまりもっともその世界で成功した人を表している。また、(6b)では「オープンソース運動におけるマーガレット・ミード¹」、つまりオープンソース分野という「未開の地」を切り開いてみんなに広く知らせた人という意味を表す。(6c)でも「サッチャー元首相はイングランドのレーガン」というのは、アメリカのレーガン元大統領と同じくどちらも新自由主義国家をまい進させる強力な指導者という役割を持っていたことを表している。

ここでもう一つ注意したいのは、固有名詞に定冠詞の **the** が用いられていることである。これは定冠詞が普通名詞化していることを示している。例えば以下を見てみよう。

- (7) a. A: Let us introduce today's staff member. This is Mary Jones. This is Mary Smith, another Mary. B: Oh, two Marys?
b. A: I happened to meet Judy at the station yesterday. B: Do you mean the Judy who is Bill's girlfriend? (早瀬 2002)

Mary という名で呼ばれる人が複数いる場合には、固有名詞も **Marys** と複数になりうる ((7a)) し、(他の人ではなく) **Bill** のガールフレンドなのかと尋ねる場合((7b))には **the** がつく。この意味操作は、同じ **Mary** という名の人があるという前提に基づき、その人々の共通性 (=Mary という名で呼ばれる人) を意味として抽出したものと考えられる。つまり、固有名詞 **Mary** は個別の人物に結びついた具体レベルの意味であったのが、そこから「**Mary** という名で呼ばれる人」という、二人が共有する共通性を表す表現となり、意味の抽象度を上げたタイプ表現、つまり普通名詞と同じ性質を帯びると考えられる。固有名詞が可算名詞に変わるのには、指示対象の概念レベルが上がって、タイプ表現になった結果と考えられる。

ちなみにこの現象は不定冠詞 **a** でも同じくように観察される。例えば **a Shakespeare** で「シェークスピアのような人」を、また **She did an Elizabeth Taylor** で「エリザベス・テラー気取りのふるまいをする」となるように、固有名詞は普通名詞と連続している。

普通名詞の意味として抽出される共通性は必ずしも定まったものではない。**Mary** のような一般的な名前であれば「**Mary** という名の人」という名前形式に依存した意味が抽出されることもあるが、有名人の場合にはその人の世間的な評価や有名なエピソードなどが取り出されることもある。ここにはいわゆるシネクドキ的な操作が行われている。たとえば **Shakespeare** のような人、という共通性を持った人物の最も適切かつ典型的な具体例は **Shakespeare** 本人である。(8a)では **Shakespeare** という具体事例を言語的に示すことにより、その人が典型的に保持していると認められる性質や属性 (をもつ人) というカテゴリー抽象的に指示していることになり、これはつまり「種で類を表す (**Species for Genes**)」タイプの

¹ アメリカの人類学者で、ジェンダーという語を使った人。ニューギニアの3つの種族についての文化人類学的研究で有名。

シネクドキが関わっており、その中でも個体の名前を、その属性をもつカテゴリー全体を指すものとして用いているのである（尼ヶ崎 (1990: 62)、山泉 (2005)）。特にこの種で類を表すタイプの解釈が理解されて成立するには百科事典的な知識がその背景にあって伝達の場合にいる人々に共有されていることが求められるため、解釈の難易度は高くなる。

このように固有名を基にしたタイプの表現は他にも多く認められる。以下はその類例である。（<http://itre.cis.upenn.edu/~myl/languageelog/archives/003394.html> も参照のこと）

- (8) a. ...it is probably only Nelson Mandela whose charisma, role, and accomplishments give him some claim to be **the George Washington of his country**.
- b. Geoffrey Moore is both **the Carl Linnaeus² and the Charles Darwin of business and markets**.
- c. One writer referred to Breathnach as **the Isaac Newton of the Simplicity Movement**.
- d. Saddam Hussein is **the Adolf Hitler of the 1990's**.

(8a)は「彼の国のジョージ・ワシントン（アメリカ初代大統領）」、(8b)は「ビジネス界のカール・フォン・リンネであり、マーケット市場でのダーウィン」、(8c)も「シンプリシティ運動の領域におけるニュートン」(8d)「90年代のヒトラー」と、いずれも共通してその固有名で指示される人に対する百科事典的な知識・世間的な評価を定冠詞 **the** によって表している。この意味が対応する形式として、ここではさらに抽象度を上げ(X is) **the <Proper Name> of Z** というスキーマを取り出すことも可能である。いずれの例でも定冠詞 **the** を伴い、固有名で表される人にまつわる特質を備えた人であることを表していると言えよう。

この固有名は、もちろん人名には限定されない。以下のように特定のグループ名であったり、病気の名前であったりと様々である。

- (9) a. “If allowed to, Hezbollah could easily become **the Taliban of Lebanon**.”
- b. The American Civil Liberties Union is now so fanatic and loosed from common sense that it has become the Taliban of liberal secularism.
- c. Don't forget #Gamergate, **the Taliban of social media**.³
- (10) a. Nationalism is an infantile sickness. It is the measles of the human race. " (Einstein's quote)
- b. but I do think that Jennifer Hepler and the likes of her are **the cancer of video gaming industry**.
- c. The newly-gained knowledge could help managers target areas that might fall next to

² Carl von Linnaeus カール・フォン・リンネは、スウェーデンの博物学者、生物学者、植物学者。ラテン語名のカロルス・リンナエウスでも知られる。「分類学の父」と称される。

³ (<http://itre.cis.upenn.edu/~myl/languageelog/archives/003394.html>)

sudden oak death, dubbed “**the Ebola of the plant world**” by one study author in a press release.

- d. In some ways, **mobile malware is the Ebola of security**. Once infected, the danger is real. But the actual risk of infection is low.

ただし病気の名前なら何でもこの Y のスロットに入るわけではない。bird flu や swine flu、また 2021 年現在まだ脅威の真ただ中にある COVID-19 は、字義通りに解釈される例はあっても、比喩的に使われている実例が現時点ではあまり見つからない。まだシネクドキ的上位カテゴリー解釈ができるほどの特徴的な評価が定まっていなためかもしれない。

また、形式的に大文字で表されるとは限らない dark matter のような「固有名詞」が用いられた事例もみつかると。こうなると、もはや固有名と普通名詞との境界は曖昧になってくる。

- (11) a. Non-coding RNA is the “dark matter” of the genomic world.
b. Why **ambivalence is the dark matter of political debate**
c. untested code is the dark matter of software
d. “Apple's iMessage is the dark matter of social messaging apps,”

これらは一般名詞であっても実は固有名詞に定冠詞がついた時と同じく「～のようなもの」という解釈が成されていると考えられる。

これまでをまとめると、一般名詞であっても X is the Y of Z という言語形式をとった場合には、Y の部分をその対象にまつわる百科事典的知識を呼び起こさせて「～のようなもの」という解釈を生み出す、いわば全体として（旧来の意味での）構文形式だと解釈できる。

4. X is the new Y

近年 Snowclone という名で知られるようになった X is the new Y というスキーマ形式も、この構文のバリエーションの一つとみなせる。厳密にはこれまで見てきた構文のうち of Z の部分が存在しないが、意味的には酷似しており、部分全体リンクで結びつけることが可能である。同時に Y の部分が具体的語彙項目である new によって特定化されているため、具体事例リンクでも同時に関連付けられる。この二つの関連付けによって認定される別の形式をもつ構文形式とみなすことができる。以下ではその特徴を考察していく。

まずこの構文形式は色を表す語彙項目周辺で顕著に用いられている。

- (12) a. Green is the new black.
b. Comedy is the new Rock'n Roll
c. Programming is the new literacy
d. Why Kindergarten Is The New First Grade

もともとは green が (black のように) 次に流行る色だ、という意味で用いられていた。「黒のように」という解釈からわかるように、the new black の black は黒そのものを意味するのではない。ファッション業界における (その時の) 黒という具体的な色彩から、それが具体例を成す上位のカテゴリー、ここでは「流行色」というカテゴリーを表すようになっている。このメカニズムは先に見た the+固有名詞の時と同じである。

類例は他にもあり、X is the new Y 構文スキーマの生産性の高さを物語る。X や Y は変数として様々なものをとる。

(13) X is the new smoking

- a. Have a seat. No, wait! Stand. With researchers suggesting that “**sitting is the new smoking,**” sit-stand desks (SSD) have become a common tool to quell sedentary behavior in an office environment.
- b. Their extensive research was summarized in one provocative statement: **Driving is the new smoking.**

(14) X is the new gold

- a. Silver is the new Gold.
- b. **Wheat**, according to the commodity dealers, **is the new gold.**

(15) X is the new oil

- a. people have abandoned petrochemicals at an ever-increasing rate. **Renewable energy is the new oil** and companies leading the field are booming.
- b. "**Water is the new oil,**" he says. "Water is going to be a very valuable commodity and we need to value it and put effort into making sure it's safe. "
- c. "**Education is the new oil**"

Oil のように、シネクドキ的なカテゴリー解釈が「重要資源」「お題目として唱えられるもの」として固定化されているものもあるが、以下の drug のように複数の解釈が導かれる場合もある。Drug は、「常習性がありかつ体に害のあるもの」という解釈もあるが、製薬業界という限定的な文脈では「売るべき商品」という解釈も出てくる。

(16) a. **DIET IS THE NEW DRUG, AS SCIENTISTS DISCOVER THAT THE BENEFITS OF FOODS GO WAY BEYOND BASIC NUTRITION.**

- b. He says that **pornography is the new drug** and his mission is to raise awareness about its destructive nature.

(17) Data is the New Drug⁴ (Title of the Book)

⁴ 製薬会社が薬にかかるデータ分析に力を入れるようになったことを受けている。Drug の意味が一様に解釈されるわけではないことを示唆している。

上記のように the new Y の Y 要素が固定化し X を自由に入れ替えるパターンもある一方で、Y も特に固定化せず X と共に様々な変数を許す表現も見らる。

- (18) a. Obnoxiousness Is the New Charisma (嫌われることがこれからのカリスマ性)⁵
b. antiracism is the new racism.

ここで X や Y に生起できる要素は名詞には限られない。COCA で[is the new ADJ_ALL .] と検索式をかけると、33 タイプの形容詞が X および・あるいは Y の要素に来ている。⁶ (19) はその例である。また(20)のように副詞とも目される要素もこの仲間入りを始めている。⁷

- (19) a. I'm about to start the promotion for **Risky Is the New Safe.** (Title of the Book)
b. HEALTHY IS THE NEW SKINNY (Title of a Blog)
c. May we never get to the place where **hate is the new normal.**
d. maybe **mature is the new hot.**
e. Good Enough Is the New Perfect (Title of a book)
f. she's got a new book out called **Strong Is The New Beautiful.**
g. Intellect. **Smart is the new sexy.**
h. According to Gourmet magazine editor, **disgusting food is the new cool.**
i. Did I tell you I've taken up knitting? It calms my nerves. Practical and stimulating. What will they think of next? **Knitting is the new yoga,** according to " New York Magazine"
j. Many obesity activists openly emulate the tobacco control lobby, even going so far as to claim that "**sugar is the new tobacco,**"
- (20) a. When it comes to weddings, **less is the new more.**
b. The average American will not be better off in five years — unemployment will remain high and wage growth will continue to be flat," says George Soros, who forecast an "age of wealth destruction" four months before the crisis hit. But in this recovery, **flat is the new up.** Any near-term uptick in jobs will probably be small, because there's still plenty to be milked from existing workers.
c. "**What we keep talking about is the new tomorrow.** There's no going back. Tomorrow will be different. "

⁵ <http://www.nytimes.com/2016/01/10/opinion/sunday/obnoxiousness-is-the-new-charisma.html? r=0>: トランプ元大統領を揶揄した記事。

⁶ 2021年3月15日最終確認

⁷ ただしいずれの例でも X および new Y の位置に生じることで名詞として「強制 (coerce)」されていると考えることは可能である。

- d. " Because of Covid-19 the **outside is the new inside.**

さらに、X の要素には名詞のみならず句や文も可能なようである。

- (21) a. **'Too Big to Fail' Is the New Mantra** for Bulls in Stock Market
b. **"All means all" is the new mantra** handed down from education gurus.
c. Beer costs cheaper! **Don't drive, only drink is the new mantra.**

このように、X is the new Y 構文にはさまざまな拡張事例が見られることがわかる。

5. 考察

XYZ 構文は様々なパターンをもつ多様性を持つことがわかった。これを構文文法の枠組みで母語話者の知識としてネットワークの形で定式化すると、どのような表示で説明していくことになるのだろうか。

近年の語彙構文文法 (Croft (2003b)、Iwata (2008) など) の主張によれば、抽象度の高いスキーマは過剰な生産性という問題をはらむ、つまり認可されるはずなのに実際には生じない gap を生んでしまうとされる。使用基盤の考え方からも、上位構文の存在は理論的には否定されないが、母語話者にとって心理的にも有効なのは、実例から抽出される下位構文スキーマであるとして、こちらを重視することを主張している。

この考え方に基づけば、まず確実に、X is the new Y という下位スキーマを別途立てる必要がある。X is the Y of Z という上位のスキーマだけではとらえきれない具体的な語彙項目 new が構文要素として固定化されているという形式的特徴を持っているからだ。使用基盤の考え方に従うと、構文スキーマはあくまでも実例に基づいてボトムアップに形成されていくことになる。それだと最初の例は Green is the new black といった色彩語によるものであり、そこから取り出されるのは X is the new Y よりもまず N is the new N というものになる。

また部分的なところで事例のクラスタ化が起こっているのも事実である。N is the new N のもとには N is the new {drug/green/Mantra} などの下位構文があり、その周辺に新しい事例が固まって生じている。このように、そのスキーマの範囲内で新しい事例が生まれることを扱うには下位構文スキーマを立てるのは有効である。さらにこのスキーマが4節で見たように様々な関連表現を生んでいることから、スキーマが定着し新しい表現を生む鋳型として参照されていると想定できる。

ただし、疑問もある。それは拡張事例がネットワーク上どのように組み込まれていくかである。具体事例からは上述のように N is the new N スキーマが抽出・仮定できるが、一方で(20)のように N ではなく A (形容詞) カテゴリーを用いた拡張例がある。そもそも N is the new N からなぜ A is the new A という異なるカテゴリーでの表現が最初に可能になるのだろうか。元のスキーマを満たす事例からの類推だとしても、そもそもなぜその類推が可能にな

るのか。さらに副詞や句・文を用いた事例が4節(20)(21)で見られたが、下位スキーマそのものからはこのような新事例が生じることを必ずしもうまく説明できない。

下位スキーマは反例がないことをうまく説明はする。N is the new N の変数を埋めるタイプの事例であれば、この下位スキーマで問題なく現象をカバーし捉えることができる。しかしそれを超える新たな創造的事例が生まれてくる際にそれを司ることはできない。新規事例は下位スキーマの範囲内に収まるものばかりではなく、拡張するところには必ず下位スキーマの守備範囲を超えた事例が出てくる。その時には下位スキーマだけではなくそれを超える上位のスキーマを考えなければならないことになる。ここではむしろ、X is Y of Z というような、カテゴリーを必ずしも特化しない抽象的な形式を鋳型として用いることで、新しい表現が生み出されているのではと考えられる。

同じことが3節で観察した XYZ 構文にも当てはまる。3節の事例からは[NP is the Proper Noun of NP]というスキーマが取り出せる。最初は Y が固有名詞に限定されるかとも思われたが、the Proper Noun という形式で性質属性を抽出して比喩的に解釈する事例だと判定されれば、固有名詞以外にも多様なカテゴリーのものが Y 要素に利用可能である。その拡張を許す時の動機づけとなるのは、実は「下位構文スキーマよりも抽象度の高い上位レベルの構文スキーマ」なのではないか。つまり、X is the new Y という、必ずしも X や Y のカテゴリーを指定しない形式に着目したスキーマが同時に取り出されるからこそ、新しい表現への拡張が可能になってくるのではないだろうか。

一方で、3節で見た事例からは、[NP is the Proper Noun of NP]という構造が取り出せる。X is the new Y 構文は、これとも関連づけが可能である。確認した通り、Y 要素は比喩的・メタファー的に解釈される性質を持っていることが共通しているし、構造も部分全体リンクという形で結び付けられそうである。

また、そもそもなぜ[NP is the Proper Noun of NP]という構造において、Proper Noun が「～のようなもの」という比喩的解釈をもつようになるのだろうか。実はそもそも、Y 要素をカテゴリー名詞として解釈するという特徴は、X is Y という通常の（比喩的ではない）一般的な措定文構造とも連続性がある。たとえば He is a student や John is a grandfather という属性を表すタイプの一般的な措定文 (Predicational Copula Construction) は、Y 要素にカテゴリーを表すものを要求する。同じように、XYZ 構文、たとえば[NP is the Proper Noun of NP]構文も、YZ に相当する the Proper Noun of NP の部分をカテゴリー解釈することで同じように措定文解釈を引き継ぐことになる。そもそもこのタイプの表現が最初に出現するときの動機づけになったのは、上位スキーマである措定文スキーマ (X is Y) であり、その意味に基づき、またその形式を引き継ぐ形で、固有名詞を用いた XYZ 構文が出現し認可されたのではないか。3節や4節で見てきた「一見特殊な」比喩解釈は、より一般的な措定文から受け継がれたものであり、固有名詞に the がつくのもその構造と並行的な意味を表すためとも考えられる。

6. まとめ

近年の構文文法理論においては下位構文が重要視される傾向にある。たしかに下位レベルの構文スキーマを設定することで、反例のない構文ネットワークの設定をすることができる。しかし、そもそも構文スキーマは、具体例に基づいて抽出されるものであり、少なくとも構文使用が拡張しつつある初期の段階では「その構文スキーマから予測するならば可能になるはずなのに、現実には実例がない」という **Gap** からは免れ得ない性質を本来的に持つものである。また、下位レベルの構文スキーマが定着していると、そのスキーマがカバーする範囲の例だけが生産的に新しく生み出されることを予測するが、しかし現実にはその範囲を超えた表現が（類推によって）生み出されることもある。この類推を許すのは、実はもっと上位に位置する、単純な形式に依存した構文スキーマであろう。下位スキーマとは異なる役割が上位スキーマにもあることを、もっと積極的にとらえていけるだろう。

参考文献

- 尼ヶ崎彬 (1990) 『ことばと身体』 勁草書房
- Croft, William (2003a) The role of domains in the interpretation of metaphors and metonymies. In René Dirven and Ralf Pörings (eds.), *Metaphor and Metonymy in Comparison and Contrast*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter, 161-206.
- Croft, William (2003b) Lexical rules vs. constructions: A false dichotomy, *Motivation in Language: Studies in honor of Günter Radden*, In Hubert Cuyckens, Thomas Berg, Rene Dirven and Klaus-Uwe Panther (eds.), 49-63, John Benjamins, Amsterdam and Philadelphia.
- Fauconnier, Gilles and Mark Turner (2002) *The Way We Think: Conceptual Blending and the Mind's Hidden Complexities*, Basic Books.
- 早瀬尚子(2002) 『英語構文とカテゴリー形成』 勁草書房.
- Hayase, Naoko (2018) Issues regarding the status of constructional schema, 『認知言語学研究』 3号, pp. 71-88.
- Iwata, Seizi (2008) *Locative Alternation: A Lexical-Constructional Approach*, John Benjamins, Amsterdam.
- Sullivan, Karen (2009) Grammatical constructions in metaphoric language. In B. Lewandowska-Tomaszczyk and K. Dziwirek (eds.) *Cognitive Corpus Linguistics*, Frankfurt/Main: Peter Lang. 57-80.
- Sullivan, Karen (2013) *Frames and Constructions in Metaphoric Language*, John Benjamins, Amsterdam and Philadelphia.
- Turner, Mark (1991) *Reading Minds: The Study of English in the Age of Cognitive Science*. Princeton, NJ, Princeton University Press.
- 山泉実 (2006) 「ドメインの統一による種で類全体を表す表現の分析」『日本認知言語学会論文集』 6: 288-298

On the Extension of Copulative Perception Verb Constructions *

ITAGAKI Hiromasa †

1. Introduction

This paper discusses peripheral copula-like instances in present-day English, as exemplified in (1) below, aiming to investigate the motivations given rise to in these novel instances.¹

- (1) a. The reefs were healthy, I was told, the cigars cheap and the rum drinks delicious.
(NOW Corpus: *Huffington Post Canada*)
- b. They [i.e., = trousers] are most likely made of a fine Sea Island cotton, which is soft, lightweight and comfortable in the heat. The alternative would be silk, which wears warm and is avoided on hot summer nights. (iWeb)
- c. On the plus side, the bed sleeps cool and provides the just-right firmness to support you on your side or back. (NOW Corpus: *Nunatsiaq News*)

The underlined phrases in (1) represent evaluations of the grammatical subject. The above sentences are idiosyncratic, in that they consider the logical object occurring in the grammatical subject and an adjectival complement. The sentence in (1a) includes *the rum*, which is normally construed as the theme of drinking, as the grammatical subject and includes *delicious* as an adjectival complement only after the verb *drink*, although this verb is usually used as a transitive verb. Therefore, these sentences seem to deviate from ordinal English grammar because they represent an evaluation, despite the use of an action verb, and can rarely be found in the web corpora. As such, this paper examines the motivations for sanctioning the sentences in (1).

While the examples mentioned above sound awkward to some extent, such creative uses are tolerated when associated with certain constructions. Especially, this paper argues that the motivations of novel sentences involve well-established perceptual constructions, which Taniguchi (1997) defines as copulative perception verb constructions (hereafter, **CPV constructions**), as in the sentence in (2).

- (2) John looks happy. (Taniguchi 1997: 270)

This paper is organized as follows. In section 2, I briefly review previous studies on CPV constructions and the creative uses associated with this construction. Section 3 identifies creative uses and classifies them into three types. Section 4 investigates the motivation for novel uses from a Cognitive Construction Grammar perspective. The final section concludes this study.

* This work was supported by JSPS KAKENHI Grant Number JP19K23062.

† Faculty of Management and Administration, Tokiwa University (itagaki@tokiwa.ac.jp)

¹ All underling was done by the author.

2. Previous Studies

2.1. CPV constructions

This section reviews previous studies on CPV constructions and their extended use. The CPV construction is displayed by the sentences as in (3).

- (3) a. John looks happy. (Taniguchi 1997: 270)
b. This cake tastes good. (ibid: 271)

The CPV constructions presented in (3) are generally composed of three elements; a subject noun phrase (NP), a perception verb, and an adjectival complement. They are of the copula type in nature: a copula sentence is a configuration that contains a functionally attenuated verb, followed by a complement denoting some property of the subject NP (Taniguchi 1997: 271). The characteristics of these constructions are commonly recognized in the literature. First, adjectival complements are obligatory with CPV constructions (Rogers 1974; Taniguchi 1997). It is no surprise that the sentences in (4) are ungrammatical, as they lack complements.

- (4) a. * He looks. (Taniguchi 1997: 272)
b. * That sounds. (ibid.)

The second property of CPV constructions is that, although they are not used in the passive voice, the grammatical subject has the role of a perceptual object, similar to a seemingly logical object, not a perceptual experiencer (Rogers 1974; Taniguchi 1997; Nakamura 2012). *John* in (3a), for example, is not the visual experiencer but the person looked at.

Finally, CPV constructions connote an implicit experiencer who can be marked by a *to* prepositional phrase as in (5). As shown in (5), the implicit experiencer is interpreted as either the speaker (*to me*) or a generic individual (*to everyone*).

- (5) a. This cake tastes good to me. (Taniguchi 1997: 272)
b. John looks happy to everyone. (ibid: 273)

The existence of a perceptual experiencer in a CPV construction is indeterminate as to how it should be realized. Further, the experiencer cannot appear as a grammatical subject because the construction may not undertake passivization, as illustrated in (6). Furthermore, unlike a passivized sentence, the perceiver cannot be coded as a *by* prepositional phrase, as in the sentence (7).

- (6) * I was tasted delicious to (by the pea soup). (Levin 1993: 188)
 (7) * Mary looks beautiful by John. (Nakamura 2012: 113)

2.2. Creative uses of CPV constructions

Several previous studies have pointed out the creative sentences in question. For example, Horton (1996) observes that sentences such as a “quasi-copula” have a more complicated semantic structure, as presented in (8).

- (8) a. The meat cuts tough. (Horton 1996: 329)
 b. The cake eats short and crisp. (ibid.)

According to Horton (1996), in these sentences, the verbs imply a causative agent who performs the verbal action. The subject participants in (8) are semantically the objects/patients of the events. Therefore, the sentence in (8a), for instance, can be paraphrased with using a transitive pattern such as *the meat is tough when someone cuts it*. However, Horton (1996) only indicates that the sentences are contained in a copulative structure as a prototype category (cf. Lakoff 1987), but does not mention the motivation for this occurrence.

Taniguchi (1997) further proposes that these sentences are brought about by means of extensions of CPV constructions, as they present an evaluation of a subject referent through his/her action, regardless of the perceptual experience. The sentences in (8) share grammatical characters of a CPV construction, in that their subject is semantically the theme of the denoted events and they commonly connote an implicit experiencer or agent. Although these expressions have not been fully established because they are distinctly odd, her observation gives an insight into the motivation of these novel sentences from a cognitive linguistic perspective.

Suzuki (2019) names the sentences “R(ead)-type” and demonstrates their grammatical behavior. Let me consider the following sentences:

- (9) a. That article reads naïve these days. (Suzuki 2019: 188)
 b. It drinks smooth and elegant despite its serious power. (ibid: 191)

Being parallel to the sentences in (1) and (8), the sentences in (9) are composed of a logical object, *that article* or *it*, as the grammatical subject and an action verb accompanied by an adjectival complement. They also represent the evaluation of patients of the events. Suzuki (2019) indicates that R-type sentences cannot appear in a progressive form, as in (10), since they mainly focus on attributive evaluations independent of the temporal aspect.

(10) * It was eating salty. (Suzuki 2019: 192)

These expressions appear to be similar to the middle construction, such as *this book reads easily*. However, according to Suzuki (2019), prototypical middles convey the possibility or ability to carry out the action denoted by the verb phrase, whereas R-type expressions focus on subjective evaluation. Therefore, a sentence like (11b) is best paraphrased with a sentence referring to the content of this book, not a sentence depicting the action relevant to *this book*.

(11) a. This book reads easily. ⇒ Reading this book is easy. (Suzuki 2019: 193)
b. This book reads arrogant. ⇒ This book is arrogant.
⇏ Reading this book is arrogant. (ibid.)

3. Observations

This section analyzes the expressions in question, using evidence from corpus data. The corpora used in this study are mainly the British National Corpus (BNC) and the Corpus of Contemporary American English (COCA). Additionally, this study also uses data sourced from web corpora. Specifically, I use the News on the Web Corpus (NOW corpus), which contains 8.1 billion words from web-based newspapers and magazines from 2010 to the present, and the iWeb corpus, which contains 14 billion words in 22 million web pages.

It is observed in this section that the expressions can be classified into the following three types: coordination, verbal extension, and constructional extension types.

3.1. Coordination patterns

The first type is represented by the sentences in (12), which are exploited in actual usage events.

(12) a. The comfortable new canvas fabric looks good and wears tough. (iWeb)
b. Horizon looks, sounds and plays wonderful. The presentation I saw at Gamescom was nothing new but it looks so good and polished. (iWeb)
c. The bike looks and handles great. (iWeb)
d. I really love this hoodie and think it feels and fits great! (iWeb)
e. I really love that little green guitar. It sounds and plays great. (iWeb)

The sentences in (12) have patient in the subject position and an adjectival complement, despite including an action verb. The point is that the perception verb instantiating the CPV construction occurs in this sentence before the action verb. These perception verbs enable the action verb to be used

to depict the somesthetic evaluation that the CPV construction typically describes.² That is, the action verb that cannot be acceptable in nature can appear with the adjectival complement with reference to the syntactic configuration of the CPV construction. Bybee (2013: 59) reports that the features of the forms in existing constructions or lexical items may influence the novel use of the items in a lexical slot. Similarly, the sentences in (12) should be tolerated with the support of the linguistic knowledge invoked by the CPV construction.

3.2. Analogical extension of a perception verb

There are a few instances in which action verbs of this sort function as quasi-copulas even without cooccurrence with a CPV construction, as shown in (13).

- (13) a. The reefs were healthy, I was told, the cigars cheap and the rum drinks delicious.
(NOW Corpus: *Huffington Post Canada*)
- b. They [i.e., = trousers] are most likely made of a fine Sea Island cotton, which is soft, lightweight and comfortable in the heat. The alternative would be silk, which wears warm and is avoided on hot summer nights. (iWeb)
- c. The dress is great. The quality is excellent. The fabric chiffon touches soft. (iWeb)

In these cases, the subject referent in (13a), *the rum*, semantically corresponds to the object of the drinking activity, *silk* in (13b) corresponds to the object of wearing, and *the fabric* in (13c) is the object of touching. These sentences can be used mainly because an analogical extension from the perception verbs instantiating the CPV construction applies to the verbs that evoke a sensory modality, such as gustatory sense or tactual sense. This analysis has also been carried out by Suzuki (2019), who argues that sentences like (14) result from the verbal extension of making direct use of the perception verb occurring in the CPV construction. Namely, these expressions come into existence by virtue of the analogical extension of the sensory modality from the perception verb of the CPV construction, such as *taste* or *feel*, into verbs such as *eat* or *drink*.

- (14) a. The cake eats short and crisp. (Horton 1996: 329)
- b. It drinks smooth and elegant despite its serious power. (Suzuki 2019: 191)

² As for the sentence (12e), the alternative phrase *play(s) and sound(s) great* is used almost as frequently as the phrase *sound(s) and play(s) great*, as exemplified in (i) below. The iWeb Corpus scored 24 hits for the collocation *play(s) and sound(s) great* and 21 hits for *sound(s) and play(s) great*.

(i) Just a fantastic instrument, Chris. I don't own one red guitar. But I'd hit that in a second. And I'm sure it plays and sounds great. (iWeb)

This is ascribed to events following order of time when we can identify a better tone quality of the instrument only after we try to play it.

Notice that the sentences in (13) or (14) are not entirely well-formed, being judged as “slightly well-formed” by my informants. Taniguchi (1997: 295) also states that native speakers reported that creative uses, including (14a), are distinctly odd. Moreover, Taniguchi (1997) reports that the sentence in (15) is almost unacceptable in current English. These expressions are hardly seen in the corpora.

(15) *? This table touches hard. (Taniguchi 1997: 295)

The unacceptability of these novel expressions may be related to a process of statistical preemption. Statistical preemption, as proposed by Goldberg (2016), is a particular type of indirect negative evidence that plays an important role in avoiding unacceptable sentences. According to Goldberg (2016: 377), when speakers recognize that a repeatedly encountering formulation B is the appropriate form in a context, they implicitly learn that a semantically and pragmatically related alternative formulation A is not appropriate in this context. The situations observed in sentences like (13) to (15) can be accounted for by statistical preemption. That is, the well-established CPV construction may be preempted over the copulative use of *eat* or *drink* as an alternative formulation and, as a result, these sentences are blocked by the CPV construction.

3.3. The patterns of *sleep*

Finally, in the following expressions, the verb *sleep* occurs with the adjective, mainly referring to temperature, such as *cool* or *warm*:

- (16) a. On the plus side, the bed sleeps cool and provides the just-right firmness to support you on your side or back. (NOW Corpus: *Nunatsiaq News*)
b. The North Face’s Beeline 900, which packs small and sleeps warm thanks to plenty of 900-fill-power down. (COCA, MAG)

Sentences of this sort are somewhat different from the expressions including verbs such as *eat* or *drink*: the verb *sleep* does not display sensory modality. Interestingly, [NP_{SUBJ} *sleep* ADJ_{COMP}] patterns can be relatively easily found in web corpora. For instance, the iWeb search for string [NP_{SUBJ} *sleep* ADJ_{COMP}] returned 27 hits. Therefore, the sentences should be motivated in a different way from the appearance in the sentences in (13) to (15). The next section will analyze the *sleep* patterns from a cognitive construction grammar point of view.

4. Discussion

4.1. Cognitive Construction Grammar

This paper draws on one of the cognitive linguistics approaches; **COGNITIVE CONSTRUCTION**

GRAMMAR APPROACH. The main idea is that the speaker’s language knowledge can be modeled as knowledge of constructions (Hilpert 2014: 22). Constructions are defined as pairings of form and meaning that do not only include idiosyncratic functions but also morphological or phonological properties and the pragmatic or contextual dimensions in which a particular utterance is found (Croft and Cruse 2004; Goldberg 2006; Hilpert 2014). Constructionists, thus, argue that constructions are crucial to a description of language.³

The cognitive construction grammar approach, which is used by linguists to analyze expressions in terms of human cognitive apparatuses such as perception, memory, abstraction, or attention, focuses on the categorical networks between constructions, such as family resemblances or categorization among constructions (Goldberg 2006). A categorical network can account for the motivation of innovative expressions as extensions. This theory posits that language creativity and extensions are realized to the extent that we are able to recognize a novel expression as pertaining to an existing construction. Our recognition of the extension relies on some similarity between the unfamiliar expression and the conventionalized construction (Langacker 2008). Therefore, this approach allows us to motivate the patterns of *sleep* discussed in the previous section with reference to knowledge on well-established constructions.

4.2. The patterns of *sleep* revisited

This section offers a cognitive construction grammar analysis for the innovative instances of the patterns of *sleep*. Before that, I investigate the semantic structure of these patterns.

Typical examples represent a comfortable temperature, like *warm* or *cool*, as in (17).

- (17) a. In other words, some sleepers could find that this mattress sleeps warm if they find themselves sinking in deeply. (iWeb)
b. The bed sleeps cool for a memory foam mattress. (iWeb)
c. During my sleep test the Endy mattress slept cool, on par with the average cooling I’ve experienced on most other foam mattresses I’ve tested. (iWeb)
d. This bed works well at alleviating pressure points and reducing motion isolation. Also, since it uses gel memory foam, it sleeps cooler than the traditional version. (Google⁴)

The sentences in (17) commonly designate a sleeper’s feeling regarding temperature during his/her sleep. That is, the adjectives *warm* or *cool*, modify the condition of the implied experiencer, as

³ This explanation implies that all description levels are understood to involve constructions, including morphemes, words, idioms, partially lexically filled phrasal patterns, and fully general ones (Goldberg 2006). In this sense, our total knowledge of a language can be captured by a network of constructions, that is, a CONSTRUCT-I-CON (Goldberg 2006; Hilpert 2014), which is the product of generalization across usage events.

⁴ <https://www.mybestmattress.com/novaform-mattress-reviews>

well as the subject referent. The sentence (17a), for example, can be paraphrased as: *if we sleep on this mattress, it will be warm and we will become warm*, and the sentence (17b) means *if I sleep on the bed, it will be cool and make me cool*. This pattern need not be accompanied with the adjectives. In effect, there are a few instances for this pattern which directly indicate the comfortable condition, as exemplified in the sentences in (18) and (19).

- (18) I waited three months to review the mattress and I could not be happier. The mattress sleeps very cool and comfortable. After the first 30 days of sleeping on the mattress, I went on vacation and spent the next two weeks sleeping on a series of different mattress. What a difference when I returned back to my Purple mattress! (NOW Corpus: *Buzzfeed*)
- (19) a. We stayed for one night and it was great. The room was clean and beds slept great. They have a continental breakfast and it was busy!! (iWeb)
 b. The mattress sleeps comfortable especially for side sleepers, however stomach or back sleepers may want to choose the Firm model. (Google⁵)
 c. Just like other memory foam mattresses, this mattress sleeps comfortable with limited motion delivery. (Google⁶)

Although this pattern fundamentally stands for the comfortable state of a sleeper on a bed or mattress, it can refer to the bedding's property, which makes him/her uncomfortable, as shown in (20).

- (20) a. About 8% of owners report that their bed sleeps hot enough to be uncomfortable. (iWeb)
 b. My mattress sleeps uncomfortable, my back completely misaligned each night. (Google⁷)

Note that the adjectival complements appearing in (18) to (20) also designate the sleeper's feeling, as well as the subject referent. Thus, these sentences can be categorized as an instantiation from a new form-meaning pairing, that is, a construction as in (21). The conceptualizer in this pattern is also involved in the situation.

- (21) *Sleep* patterns as a construction:
 SYNTAX: NP_{SUBJ} – *sleep* – ADJ_{COMP}
 SEMANTICS: NP_{SUBJ} feels ADJ_{COMP} and makes someone (mainly, the conceptualizer) ADJ_{COMP} as s/he sleeps on it.

The semantic structure involving the existence of the implicit conceptualizer advances a

⁵ <https://www.memoryfoamtalk.com/reviews/cocoon-mattress-review/>

⁶ <https://besthomeshoppingreviews.com/high-rated-memory-foam-mattress/>

⁷ <https://okaydonkeymag.com/2019/09/09/serpentarium-by-clara-bush-valada/>

suggestion that these sentences are subjectively construed. On the cognitive linguistic theory, in which one of the fundamental claims is that it is very important to adopt a conceptualizer to construe a situation in linguistic semantics, subjectivity is the degree to which the role or existence of the conceptualizer occupies a designated situation (Langacker 1987). It can be said that the *sleep* patterns are also depicted in a highly subjective status of construal.

Why does subjective construal play a key role in the semantics of the *sleep* pattern? This question can be answered by arguing that this pattern extends from the CPV construction. As mentioned above, subjectivity is the degree to which the role or existence of the conceptualizer conforms to a designated situation. Employing Langacker's (1987) cognitive theory of subjectivity, many cognitive linguists observe that the CPV construction is highly subjective in the cognitive apparatus discussions on "subjectification" (Gisborne and Holmes 2007; Taniguchi 1997; Whitt 2011). They thus conclude that the CPV construction is subjectively construed in that the implied experiencer, namely the conceptualizer is strongly involved in the denoted situation although he/she is not literally encoded.

What is important here is that the *sleep* patterns represented in (21) share functional characteristics with the CPV constructions, such as the subjective status of construal, as well as the syntactic configuration of [NP – V – ADJ]. Therefore, this constructional pattern sanctioning the novel expressions in (17) to (20), can be once again analyzed as extended from a CPV construction.

My argument is supported by the evidence in (22) to (23) that the patterns of *sleep* can occur with the experiencer in a *to* prepositional phrase just like in the CPV construction in (5); moreover, the sentences in (23) portray the actual experience of the speaker in the past.

(22) This mattress sleeps cool to us, never [I] woke up hot and ... (comment on Amazon.com⁸)

(23) a. Everyone says it sleeps cool but it slept warm to me. (Google⁹)

b. These actually slept cool to us but both were way too firm and [got] the smell, weeks later wouldn't go away. (Google¹⁰)

5. Conclusions

This paper has examined the motivations of peripheral copula-like instances in which the grammatical subject requires a logical object accompanied by an adjectival complement. These examples sound awkward to native speakers to some extent. However, it has been observed that such creative uses are tolerated when associated with CPV constructions. Moreover, I have demonstrated that they are produced not just by the analogical extension of verb meaning, but also with reference to the semantics of schematic CPV constructions, in which the conceptualizer is strongly involved in the denoted situation.

⁸ <https://www.amazon.com/Inch-Pillow-Memory-Foam-Mattress/product-reviews/B00I4HJ9QC>

⁹ https://www.reddit.com/r/Mattress/comments/j6br84/idle_latex_mattress_3_weeks_later/

¹⁰ https://www.reddit.com/r/Mattress/comments/h8bfov/please_help_me_out_of_revolving_bib/

References

- Bybee, Joan N. (2013) Usage-based Theory and Exemplar Representations of Constructions. In Thomas Hoffmann and Graeme Trousdale (eds.) *The Oxford Handbook of Construction Grammar*, 49-69, Oxford: Oxford University Press.
- Croft, William and Alan Cruse (2004) *Cognitive Linguistics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Gisborne, Nikolas and Jasper Holmes (2007) A History of English Evidential Verbs of Appearance. *English Language and Linguistics* 11(1): 1-29.
- Goldberg, Adele E. (2006) *Constructions at Work: The Nature of Generalization in Language*. Oxford: Oxford University Press.
- Goldberg, Adele E. (2016) Partial Productivity of Linguistic Constructions: Dynamic Categorization and Statistical Preemption. *Language and Cognition* 8: 369-390.
- Hilpert, Martin (2014) *Construction Grammar and its Application to English*. Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Horton, Bruce (1996) What are Copula Verbs? In Eugene H. Casad (ed.) *Cognitive Linguistics in the Redwoods: The Expansion of a New Paradigm in Linguistics*, 319-346, Berlin, New York: Mouton de Gruyter.
- Lakoff, George (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. Chicago, London: The University of Chicago Press.
- Langacker, Ronald W. (1987) *Foundations of Cognitive Grammar. Vol. I. Theoretical Prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. (2008) *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford: Oxford University Press.
- Levin, Beth (1993) *English Verb Classes and Alternations: A Preliminary Investigation*. Chicago, London: The University of Chicago Press.
- Nakamura, Fuminori (2012) A Semantic Approach to the Complement of the English Copulative Perception Verb Construction. *Proceedings of the 14th Conference of the Pragmatics Society of Japan (PSJ 7)*: 113-120.
- Rogers, Andy (1974) *Physical Perception Verbs in English: A Study in Lexical Relatedness*. Doctoral dissertation, UCLA.
- Suzuki, Toru (2019) Katsudou Doushi wo Fukumu Zokuseihyoukabun no Kakuchō to Ryougiteki Kaishaku. In Makoto Sumiyoshi, et al. (eds.) *Kanyouhyougen/Hensokutekihyougen kara Mieru Eigo no Sugata*, 188-204, Tokyo: Kaitakusha.
- Taniguchi, Kazumi (1997) On the Semantics and Development of Copulative Perception Verbs in English: A Cognitive Perspective. *English Linguistics* 14: 270-299.
- Whitt, Richard J. (2011) (Inter)Subjectivity and Evidential Perception Verbs in English and German. *Journal of Pragmatics* 43: 347-360.

執筆者紹介 (掲載順)

- 小瀬 哲哉 (こぐすり てつや)
大阪大学大学院言語文化研究科 (言語文化専攻) 准教授
- 坂場 大道 (さかば ひろみち)
大阪大学大学院言語文化研究科 (言語文化専攻) 博士後期課程
- 瀬戸 義隆 (せと よしたか)
立命館大学言語教育センター外国語属託講師
大阪大学大学院言語文化研究科 (言語文化専攻) 博士後期課程
- 田尾 俊輔 (たお しゅんすけ)
大阪大学大学院言語文化研究科 (言語文化専攻) 博士後期課程
- 中尾 朋子 (なかお ともこ)
大阪大学非常勤講師
- 早瀬 尚子 (はやせ なおこ)
大阪大学大学院言語文化研究科 (言語文化専攻) 教授
- Hiromasa ITAGAKI (いたがき ひろまさ)
常磐大学総合政策学部助教

言語文化共同研究プロジェクト 2020

認知・機能言語学研究 VI

2021年5月31日発行

編集発行者 大阪大学大学院言語文化研究科

